

# 国際理解と平和の教育について(第2報)

斎藤 真子 田中 裕巳

原 幸宏 丸山 豊

## 1. 高2沖縄研究旅行初年度の実践について

斎 藤 真 子 田 中 裕 巳

**【抄録】**高2の研究旅行が広島・長崎から沖縄に変更された初年度の実践報告である。沖縄への研究旅行は、本校の平和教育としての研究旅行の伝統を受け継ぎつつ平成2年度からの学校改革の中心テーマ『教育活動の総合化……国際理解と平和の教育を軸として……』の一環として取り組まれた。1年生の時からの様々な事前指導の実態、行程の概要と特色、実施過程の問題点、事後指導、生徒たちのアンケート・感想などを分析したものである。

**【キー・ワード】**研究旅行としての修学旅行、平和教育（学習）、グループワーク、戦争体験の継承、平和ガイド

### I. はじめに

本校では、1989年度から中学校の入試方法を改革し、特色ある中・高6か年一貫教育のあり方を全校をあげて模索してきた。その学校改革の基本テーマが「教育活動の総合化……国際理解と平和の教育を軸として……」と定められ、89年から90年にかけて、教育課程・国際理解・平和教育・生徒指導・学校行事の5つの側面からの具体的なプランが検討された。

本校の高校の修学旅行には、総合学習または平和教育の実践の場としての長い伝統がある。観光を主眼とした修学旅行ではないということを意識させるために研究旅行と称してきた。この研究旅行を野外学習の場としてとらえ、地理・歴史・文学などを中心として超教科の立場から指導し、総合的に学ぶ機会とする位置づけは、奈良・京都を中心とした時代から確立されていたようだ。山陽新幹線の開通以後、広島を中心とした時代（75～87年）に入るが、この時代の実践については本紀要でも何度か取り上げられている。

・徳井輝雄・田中裕巳・白井宏・山田雄一・服部祐子「総合学習の場としての研究旅行の試み」（第25集、80年）

・白井宏「高校2年生の“研究旅行”——総合学習のひとつの実践としての——」（第29集、84年）

・高木徹「“研究旅行”と読書指導」（第32集、87年）  
この他、教科での実践を中心とした田中の『戦争を知らない子どもたちにとってヒロシマとは……』（第1集～第4集、77年～83年）の発行があり、これに掲載された生徒たちの感想文7編が『子どもたちの見たヒロシマ』（文沢隆一編、広島平和記念資料館監修、汐文社）に転載された。

88年、89年の2年間は長崎を中心とした研究旅行が取り組まれた。この長崎を中心とした研究旅行の実践については次のものがある。

・長谷川弘「高校一年次での研究旅行に向けての指導」（第33集、88年）

この論文は、長崎に変更された経緯、実施前（1年次）での指導が中心である。残念ながら2年間の長崎での研究旅行の概要・問題点等はその後まとめられていない。

このような高校の広島および長崎での研究旅行の実践をふまえ、本校の教育活動の総合化の中心として中学の研究旅行を広島へ、高校の研究旅行を沖縄へ変更することが論議・決定され、高2沖縄研究旅行がその

第1回として90年に取り組まれたのである。

本稿は、この研究旅行の実施、指導に当たって、高1から持ち上った田中と、高2で生徒たちの旅行委員会を指導し、担当教科の国語でも事前指導に当たった斎藤が分担して執筆したものである。事前指導、実施段階での取り組み・問題点、事後指導などを、今後への参考として書き留めておくことが主眼であるが、生徒の沖縄観の変化、平和認識の問題などが十分に分析しきれていないことを危惧している。 【田中】

## II. 1年生での事前指導

### 1. 沖縄に決定するまで

学校改革の意向を受け、高1担任団で2年次の研究旅行の行き先を沖縄へ変更する原案を固めたのは、89年の10月であった。この長崎から沖縄への変更をめぐって、教官会議では色々な論議があった。

①長崎は2年間しか実施していない。

②長崎は、原爆の問題だけでなく、歴史的には南蛮貿易・中国との貿易、地理的には造船業などフィールドワークのテーマにも恵まれている。

③沖縄への変更は、経費の問題、飛行機利用の問題など、問題点が多くすぎる。

これらが沖縄への変更に、反対または保留の代表的な意見であった。沖縄への変更という原案の理由や支持する意見は次の通りであった。

①学校改革の意向を受け、国際理解と平和教育の実践として。

②生徒・保護者の希望、保護者の中に沖縄での平和教育を、という強い希望がある。(以上は高1担任団の提案理由より)

③沖縄は太平洋戦争で唯一地上戦の展開された地であり、沖縄戦の実相から日本軍による民間人の虐殺などの経緯・背景などを学ぶことは、被害者としての平和教育だけでなく、加害者としての平和教育という平和教育の質的深化のためにも必要な変更だ。また戦後45年の基地沖縄の実態に触ることは、今日の日本の平和とはなにかを考えさせるであろう。

④長崎への変更の際は、変更の理由が十分審議されなかった。

11月17日の教官会議で採決に付き、原案賛成が多数ではあったが、保留が多く過半数に達しなかった。高1担任団は旅行委員会を通して、結果を説明し行き先の再検討に入ることを要請したが、生徒の納得は得られなかった。3クラスでの討議をまとめて、旅行委員会は教官会議での再審議を求める請願書を担任団に持ってきた。担任団はこれを受けて、11月30日の会議に再提案し、採決の結果、多数の支持が得られた。

この教官会議の決定後、旅行社(近畿日本ツーリス

ト)が一応の見積を持ってきたのが12月12日であった。11月には名古屋市内から中京高校の出発が予定されており、出発日は11月12日(月)から14日(水)、または19日(月)となること、名古屋空港発の全日空沖縄行き中便、那覇に2泊、かりゆしビーチに1泊という概要であった。

担任団としては、沖縄での平和学習のガイドとして、今回は第1回目の試みでもあり、“平和ガイドの会”にお願いすることを考えていた。この会と現地のバス会社との関係では沖縄バスがスムースであるということで、沖縄バスの利用を考えていたが、旅行社との系列があり、琉球バスから沖縄バスへの変更は難しかった。平和ガイドの会に問い合わせたところ、別に沖縄バスでも構わないということであったので、沖縄バスへの変更にはそう固執しなかった。市内の私立同朋高校の場合は、同様な観点から沖縄バスへの変更に最後までこだわり、結果的に、バス会社の決定に問題が残ったと聞く。この点は、琉球バスを利用して、当日のバスの停車位置などに若干の問題もあったが、平和ガイドの添乗には何も問題はなかったようだ。

### 2. LTや「附属の時間」を使った指導

学校改革の中で、木曜6限の“必修クラブ”的方が見直され、①従来の部・クラブの時間であるとともに、②国際理解と平和のための教育の時間、③学校行事の準備という3つの機能を持つようになった。名称も「附属の時間」に変更され、研究旅行の事前指導にも②の趣旨から何度も利用された。研究旅行の事前指導として3学期に2回の合同の催しを持った。

#### (1) 映画「沖縄戦・未来への証言」を見る

1月29日、小体育館2Fにて、名古屋共同映画新社から借りたフィルム「沖縄戦・未来への証言」を鑑賞した。体育館は暖房がないので震え上がりながらの鑑賞であった。この日の様子について、学年だより『CLEAR』第35号から、私の文章と生徒の感想とを転載する。

#### 『沖縄戦・未来への証言』を見て

29日はこのほか寒い一日でした。雪こそ降りませんでしたが、映画の会場とした小体育館(柔道場の上)のフロアは、靴下で歩いてもヒンヤリとくるような寒さでした。

6限の開始は2時20分なのですが、生徒の集まりが悪く、映画を始めたのは30分を過ぎていました。寒いからできるだけ着込んでくるようにと担任から指示してもらっていましたが、それに時間を食われたのでしょうか……。映画は沖縄の青い海と無数の墓標から始まりました。いつまで経ってもざわざわペチャくちゃ。この雰囲気はいかんなあと思っていましたが、

那覇への十・十作戦（1944.10.10）、特攻隊のアメリカ艦船への体当たり作戦のシーンあたりから、波が引くように静かになって行きました。

映画は、前半が米軍による沖縄制圧までの戦闘の様子、住民の集団自決、日本軍による住民の虐殺を中心とし、後半は戦後の基地問題、本土復帰を中心でした。米軍が撮影したフィルムを中心として編集された映画だからやむを得ない事なのかも知れませんが、米軍による制圧作戦はもっと陰惨を極めたのではないでしょうか。壕（ガマ）の中に爆弾を投げ入れたり、火炎放射器で焼き尽くすシーンなどありました、アメリカが日本に返還をためらったフィルムがまだきっとあるような気がします。

後半の部分についても、戦後占領体制下での米兵による住民の虐殺（隆子ちゃん事件）などの問題が触れられていましたが、アメリカのアジア侵略の拠点としての沖縄の軍事的意味・・・特にベトナム戦争との関わりなど強調されても良かったように思いました。また核装備の問題もあっさりとしか触れられていませんでしたが、これらの問題は、また別の機会の事前学習や生徒達のグループワークの課題にもなるでしょう。いろいろ注文はありますが、沖縄戦の実態をつかむにはよい映画だったと言えるでしょう。（田中 裕巳）

### 『沖縄戦・未来への証言』を見て①

前から、いろんなことを聞いていたけど、改めてみるとすさまじかった。私たちはこんな悲惨なことが本当に昔おこった島へ行こうとしていると思うと、ただ遊びに行くだけだと軽々しく考えてはいられないと思いました。映画には、かわいそうを通り過ぎて、“むごい”としか言いようのない人達がうつっていた。死体が道端にあるのはもうふつうになっていて、みんな自分のことに精一杯で誰もうめたり、葬ったりする人がいなかった。

この当時は感覚がマヒしていたんだろう。精神異常者が出ると言ってたけど、本当にその通りです。正常でいられるはずがありません。昔の沖縄のことをしっかり頭にいれて、少しずつ昔の傷跡を直して行っている今の沖縄を見てきたいと思います。（友住よし恵）

なんかすごく重い映画だった。ぼくは人が殺される戦争映画はみたことがあったけど、沖縄のやつは、集団自決という自分たちから死んで行くのにはさすがびっくりしたし、そうさせた当時の日本がとてもこわくなかった。（岡田 聰）

自分にとって“太平洋戦争”とは既視感である。つまり自分は経験していないのにこういうのを見ること

により戦争についてあたかも“理解している”ようになる。確かに映画は目をそむけたくなるような光景をうつしていましたが、結局それが何になるのかがぼくにはわからない。ぼくは沖縄と平和という点でいくと過去そのものの太平洋戦争の傷跡を見て、そのことについて考えるのも大事だが、今これから重要な問題となって行く在日米軍やその基地、自衛隊や安保について考えた方が、戦争を知らない立場として、より大事じゃないかと思った。

（荒井 剛）

### （2）講演「沖縄の自然と文化」

高1での事前指導第2弾として、沖縄の自然や文化に関心を持たせることを目的として、名古屋民俗研究会の伊藤信吉先生（愛知学院大学歯学部）を講師にお招きして講演会を持ったのは3月5日であった。この講演会について、学年だより『CLEAR』第40号の私の文章と生徒たちの感想を転載する。

#### 伊藤先生の講演の感想

月曜日6限のLTは、名古屋民俗研究会代表の伊藤良吉先生の講演「沖縄の自然と文化」を3クラス合同できました。一週間前にお送りいただいた詳細な資料（沖縄の歴史、気候、暦、祭り・慣行などについて）を配布し、先生がご自分で撮ってらしたスライドを見ながらのお話は、11月に沖縄を訪れる生徒達にもとても興味深いものであったと思います。2年生になってからのグループワークのテーマ決定にも大いに参考にして欲しいものです。

今週はテストの返却で、全員に感想を書いてもらう時間がありました。A組とB組の旅行委員に代表して感想を書いてもらいました。（田中）

沖縄の言葉の母音は「え」→「い」、「お」→「う」で話す、つまり母音が「あ」「い」「う」の3つしかないことを知った。「おきなわ」だったら「うきなわ」とちょっと調子くるう感じはしたけれども面白いと思った。（「おおえ」→「ううい」）スライドの中で一番興味を持ったのは、サンゴで出来た岩が上昇して崖となって、海水によってけずられて鍾乳洞が出来るということです。スライドなどを見ていっそう沖縄へ行く気持ちが高まりました。（A組 紙谷 建穂）

沖縄の言葉はあまり理解できません。沖縄の祭りがちょうど私達が行く頃にあるかもしれないと言っていたので、もし見れるなら見てみたいです。沖縄にはハブがいるけどまだ一度も見ていないと言っていたので安心しました。沖縄に早く行ってこの目で沖縄を見たいです。（A組 遠藤 公世）

沖縄には独特な文化が残っておりその文化は日本本土の昔の文化と深くつながりがあったので、日本人の自国の知識が少ないという点からも、沖縄の文化を研究旅行で詳しく調べたいです。 (B組 足立 千恭)

伊藤先生のお話はとても興味深いものでした。沖縄の文化が本土の文化とかなり食い違っているという事は前々から知っていましたが、言葉から男女の立場、お祭りそして先祖を祭るために有り金をすべてはたいて料理をそなえるなど、とてもダイナミックで信仰心のあつい素朴な人たちだなと思いました。

修学旅行で沖縄に行った時には、伊藤先生に言われたように沖縄の人々に話しかけてみようと思います。

(B組 中原 果絵)

### 3. 教科での事前指導

私の担当教科「現代社会」においては3学期に2回ばかり行った。いずれもビデオを見せ、その感想を書きさせた。

学年末テスト終了後の第1回は、「安保が見えるニッポン……沖縄・横田からの報告」(90年1月、NTV)は、沖縄の基地公害、軍事演習の問題を扱ったものであった。これを見たときの生徒の感想を2つ紹介しておきたい。

僕はちょうど去年の夏、沖縄に行ったことがあったが、そこで嘉手納基地を見てきた。大きな基地で戦闘機がびゅんびゅん飛んで外人がたくさんいた。僕はその時はまだ戦闘機とか軍人とかって、かっこいいなあと思ってた。でもこの現社の時間でのビデオを見ていくにつれて、そんな自分が情けなく思えてきた。このビデオを見た30分でもこの騒音がなんてうるさいんだと思ったのに、この音を沖縄の人が毎日聞いているのかと思うと同情の気持ちでいっぱいだ。

(北川 和穂)

インタビューで“基地についてどう思うか?”という問い合わせに対して、“私は生まれたときから基地があるのでこれが普通です。”と答えた若い人がいた。沖縄はそんなに長い間、あのような状況だったのだと思いました。また座り込みをしていた人たちの涙が、苦しみ、悲しみなどすべてを物語っていました。沖縄の人たちだけでなく、私たち本土の人々が、もっと真剣に取り組めば基地撤回が出来るかも知れないと思います。だからそうするべきだと思います。そのためにも研究旅行でしっかりと沖縄の本来のすがたを見てこようと思います。

(高木真理子)

第2回目に見たビデオは、「精神風景 昭和が終わった日 オキナワ」(89年3月、NTV)であった。昭和天皇「崩御」の日の沖縄県民の姿を沖縄のカメラマンが追うという内容であった。これについては学年だより『CLEAR』第41号で私がこの授業のこと觸れ、生徒の感想も載せているので資料として紹介しよう。

#### 『昭和が終わった日 オキナワ』を見て

9日(金)の現社の時間に、昨年3月中京TV(NTV製作)が放送した「精神風景 昭和が終わった日 オキナワ」という番組をビデオでみました。沖縄県民にとって昭和とは、昭和天皇とは何だったのか、深く考えさせられる番組でした。

・オキナワは米軍基地がある。米軍に土地を取られた人はかわいそうだ。しかしオキナワの人は、がんばって生きている。天皇をにくむオキナワ人は少なくない。戦争を始めた人々は処罰されたのに、天皇は戦争に関係していたと思うが、なぜ処罰されないのか、神だとかいっていたくせに、人間宣言するし、あまりそういうことをいうと、天皇批判をすると右翼がでてくるし、まったくこまったものだ。オキナワはかわいそうだ。もっと日本中が観光地だけのところと思わず、本当の中身を見る必要があるのだろう。

(B組 川瀬 正人)

・沖縄は、まだ昭和が終わっていない。戦争と背中合わせに生きている」とナレーターが言ったとき、名古屋に生まれてよかったなと感じました。仮に、沖縄に生まれ育ってたら、今、生活しているようにはいかないのではないかと思う。今まで私が想像していた沖縄とは、ケタはずれに違っているのは、自分が余りにも無知であったわけで、とてもなきれないと思う。研究旅行では、どんな事実もちゃんと受けとめて、改めて、沖縄について、考えられることが出来たら、と思います。

(B組 中村佳代子)

生徒たちの中には、沖縄とは「青い海と白い砂浜」というリゾート地帯としての沖縄、観光とレジャーの島としての沖縄という既成のイメージがある。研究旅行とはいえ、“修学旅行”なのであり、沖縄戦や基地問題の学習よりも、内心ではその既成のイメージで、観光ツアーのような旅行をしてみたいという気持ちを持っているものも多い。そのような既成のイメージをどうやって壊し、観光ツアーではない、「平和とはなにか」を考えるための研究旅行であるという自覚を形成する上で、これらの1年次での事前指導は多少の効果があったと思う。「私たちはこんな悲惨なことが本当に起こった島へ行こうとしていると思うと、ただ遊びに行くだけだと軽々しく考えてはいられないと思いました。」(友住よし恵)、「もっと日本中が観光地だけ

のところと思わず、本当の中身を見る必要があるのだろう。」（川瀬正人）などの発言にみられるように、この頃から生徒たちの沖縄認識には、少しづつ変化が出てきたように思う。

【田中】

### III. 2年生での事前指導

#### 1. 『昭和史の中の沖縄』の感想文

1年次の指導を2年次につなげるために、春休みの宿題に岩波ブックレットの『昭和史の中の沖縄』（大城将保著）を読み、800字程度の感想文を提出することとした。同書は、沖縄の歴史研究者の立場から、沖縄の戦前・戦後をコンパクトに紹介し、沖縄の現在をアジアとのつながりでとらえている好著である。あとで触れるところになるが、7月の学校行事の観劇が沖縄を舞台とした『歌え、『愛』の子たちよ！』に春休み前に決定していた。この劇の原作者も大城将保氏であるところから、同書を選定したという背景もあった。

提出は生徒たちが2年に進級した4月の始業式後であった。ところがその提出状況はあまり芳しくはなかった。2年生になってからの担当教科が選択科目の倫理、受講生は1クラス強の50名余りで、授業中に督促することの出来ない弱みがあった。2年次での学年だより『かりゆし』の第5号で、私はこんなことを書いた。

#### 『昭和史の中の沖縄』のこと

大城将保著『昭和史の中の沖縄』（岩波ブックレット）の感想文は春休みの宿題でした。始業式に提出ということでしたが、連休が過ぎても、提出した者は67名だけです。沖縄への研究旅行が、研究第一、遊びは第二か第三であるためには、この小冊子の感想文くらいは提出して欲しいものです。中間テストまでには出して下さい。

大城将保さんには、春休み中の下見の際、勤務先の沖縄県庁でお会いして来ました。ご都合が付けば、研究旅行の第一日目（11月19日）にホテルで講演をして下さる予定ですし、研究旅行全体のコースについてもいろいろ相談に乗って下さいました。

『昭和史の中の沖縄』のプロローグは、国道58号線“海上を走る国道”的話、エピローグは“南へのびる道”的話でした。米軍が作った“ルートNO.1”が、琉球政府道1号線となり、日本復帰後、国道58号線になった歴史は、道に刻まれた沖縄の歴史です。そして、鹿児島から種子島、奄美大島、那覇と続く“海上を走る国道”的不自然さは、本土との精神的な遠さの象徴のようにも思えます。

感想文で触れている人はほとんどいませんが、表紙裏の那覇を中心とした東アジアと日本の地図は衝撃的

なはずです。沖縄の人々（ウチナンチュ）と本土の人々（ヤマトンチュ）の視点の違いが一目瞭然です。那覇－東京よりも、那覇－台北、那覇－上海、那覇－ソウルの方が、はるかに近いのです。だからこそ、エピローグ“南へのびる道”で大城さんが、「沖縄に立つとアジアがよく見える」と書いているのは、きわめて当然のことだと思います。沖縄の朝鮮人、中国人、フィリピン人そしてその混血児の問題を通して、日本とアジアの問題を考えてみるのも、研究旅行の研究テーマの一つにならないでしょうか。（田中 裕巳）

次に生徒たちの感想文を2編ご紹介しましょう。

#### 『昭和史の中の沖縄』を読んで

松井 哲郎

今まで、沖縄といえば、夏、海、そして水着のギャル等、明るく、日本で一番のリゾート地としか思っていなかったけど、この本を読んで、自分の浅はかさを知ると共に、今までとは違った意味で、沖縄へ行きたいと思います。

この本には、いろいろと訴えるべきことが書いてあるわけだけど、僕が一番許せないと思ったのは、アメリカの横暴さです。特に住民達の意志で選出した瀬長市長を無理矢理クビにしたり、プライス調査團の発言等、現地の人たちを無視したやり方は許せない行為でしょう。そして、当時の日本の政府の無責任さにもあきれてしまいました。戦争が終わったことも知らずに玉砕していった人々や、自ら命を絶った人もいたというのに、アメリカに支配を要請するような文句を発した当時の政府は何でしょう。

一方こうして、アメリカには植民地のように利用され、日本にも見捨てられたも同然の地で、負けずに自由と自分の土地を取り戻すために今まで、そしてこれからも戦って行く、沖縄県民の不屈の精神には、ただ脱帽するばかりでした。

ただ一つ、疑問に残ることがありました。それは、沖縄の人達が、アメリカが支配していた当時、日の丸の旗を掲げたがっていたということです。つい最近のことだったと思うけど、沖縄国体か何かの時に、掲げてあった日の丸の旗を引きずり落とすという事件がありました。アメリカの沖縄であった当時と、日本の沖縄県である今とで現地の人達の心境がどのようにして、どれほど変わったのか、そこらへんのところが、結局分からずじまいになってしまいました。

しかし、この本を読んで、ただ一つ、沖縄の人達は、戦争というものに対して、人一倍憎しみを持っていると確信しました。

### 『昭和史の中の沖縄』を読んで

田中秀歩

僕は以前、沖縄戦やその後のアメリカの管理下におかれていた沖縄の出来事をよく知らなかったが、一連のビデオやこの本で知って平和についてより深く考えられるようになったと思う。

現在、沖縄は日本に返還されているといつても実際はいまだに米基地が昔のまま残っており、この現実を見るにあたり、軍隊は本当に必要なのかといった根本的な問題にたちかえらずにはいられない。安保反対運動や沖縄の諸運動から数年がたってしまった今、問題が表面化されず素通りになっているが、原点に戻って基地の撤去を実現しなければならない。

ベトナム戦争にしても日本が基地を貸したり承認したりしている以上、“共犯者”なのだ。平和主義問題にかかわるのは自衛隊だけでなくこの点もかかわってくると思う。

昔から郷土のために戦い、不利な立場に長年おかれてきた沖縄の人々だが、簡単に同情したり、心を読み取ろうとするることはできないと思えてきた。本土とは戦争状況も戦後も全く異なり、沖縄自体も独自の伝統と社会が形成されているため、そういった事をまず理解しなければだめだと思う。その点でこの本は随分助けになると思うが、他にもっと研究すべき点があると思う。

以前から沖縄と本土との隔たりはテレビや新聞などで多少聞いているが、その中の一つ、天皇問題で沖縄の世論において天皇に対しての怒りが激しく皇太子夫妻が訪沖した時反対デモがすごかったのを覚えている。その時は何故あんなに根みを持っているのか分からなかっただけだが、この本を読み沖縄の事を知るに付けてだんだん分かったきた。今では恥ずかしく思うが、このようにはっきり認識していない人が今でもかなり多いと思う。沖縄が返還され戦争や植民地にされていた事が昔の事のようになってしまってはいないか。本土の僕達も他人事と考えず、基地の撤去と安保の廃棄に向けて皆に伝えていかなければならない。

### 2. アニメ映画『琉子 白旗の少女』の鑑賞

1月に『沖縄戦・未来への証言』を見ているが、沖縄戦の過酷さについてアニメで描いている『琉子 白旗の少女』を6月11日のLTで見せることになった。これも名古屋共同映画新社からのレンタルで、せっかく借りて来るのだから「他の学年も希望があればどうぞ」と声をかけると、中1の担任団から見せたいという要望があった。これについても、学年だより『かりゆし』から、私のレポートを紹介しておこう。

今日6限のLTでは、『琉子の白い旗』というアニメを中1の諸君と合同で見ました。もちろん高2の企画に中1が相乗りという格好ですが、中1に弟のいるC組の後藤さんは、姉弟で一緒に見たと言うわけです。これを書いてるのは見る前なのですが、高2と中1、さて学年としてはどちらが静かに見れたでしょうかねえ。高2が悪い見本を見せませんように。

2月の『未来への証言』は、全く寒い中での鑑賞でした。アメリカ軍が写したフィルムを1フィート運動で買い取ったものでした。今回のことは、アニメですし、沖縄の人々の側からの訴えが強く出ていると思います。『未来への証言』の撮影者の視点がアメリカの側にあったとすれば、このアニメの視点は、あくまでも沖縄の人々の視点であり、壕（ガマ）の中からみたアメリカ軍、そして友軍であったはずの日本軍の真の姿、残酷さがよく描かれているのではないでしょうか。

“白旗の少女”がニュース・ステーションで取り上げられたのは、もう2年前でしょうか。“白旗の少女”は実は比嘉富子という人で、当時50才になってみました。幼き日の比嘉さんは、『未来への証言』の中で白旗を振って壕から出てきた少女としてフィルムにおさまっていました。その比嘉さんが自分を撮ったカメラマンを探しにアメリカへ出かけたというのがニュース・ステーションで取り上げられた訳でした。

この春休み、研究旅行の下見で沖縄へ行ったとき、大学時代の先輩で沖縄大学の教授をしている平良さんにも会ってきました。比嘉さんは、2、3年前まで沖縄大学の夜間の学生もしていたのだそうで、比嘉さんのお話などを沖縄でお聞きするのも良いかも知れませんね。（田中裕巳）※『かりゆし』第9号（6月11日）より

### 『琉子 白旗の少女』を見て

先週の月曜日、LTでアニメ『琉子 白旗の少女』を見ました。実に暑い日で、上映間際まで、小体育馆の窓は全部開放して換気につとめておいたのですが、窓を閉め、カーテンを引いた後は、直ちにサウナになってしまいましたね。豊田講堂が冷暖房完備になるということで、豊田講堂を借りたかったのですが、目下その冷暖房のための工事中だそうです。残念でした。

せっかく高2がフィルムを借りて来るならということで、中1も担任団の要望で一緒に見ました。高2はすでに、『未来への証言』などを見たりしているからなのでしょうか、変なところでどっと笑い声が出て、こちらが恥じ入りました。

しかしこの文章は変ですね。『未来への証言』などをすでに見ていれば、しつせん笑える話ではない、ということくらい分かるはずなのです。なにがおかし

かったというのでしょうか。日本兵の表情でしょうか。それにしても中1からではなく、高2だけから笑い声が起こるという精神状況が私にはさっぱり分かりません。

『未来への証言』などを見た後では、アニメ『琉子白旗の少女』の受け取り方も深いものがあつて良いはずです。中1の生徒達は、相当のショックを受けたようだと担任の先生から聞きました。戦場というのは、わずか数10センチの差で生死が分かれれるほど過酷なものだし、なによりも県民の4分の1はこの地上戦で死んでしまったということが、ショックを与えないはずがありません。

すこし内容に入ってしまいましたが、先週号に書いた『琉子の白旗』は、正確には『琉子 白旗の少女』でした。サブタイトルとごちゃまぜになってしまっていたわけで、ごめんなさい。琉子が一人ぼっちになってしまってからの心理描写が出色だと思いました。戦場では、「食い物が減るからついて来るな」と石を投げられることも、本当にあったことでしょう。人の死が、毎日、そしてそこら中にごろごろしていれば、死体につまづいても、死体の浮いている井戸から水を飲むことも、きっと平気になってしまうことでしょう。

「アメリカよりも日本兵が怖かった」という言葉の中に、何を読み取れば良いのでしょうか。「軍隊は国民を守るものではない」というナレーションがあったと思いますが、日本兵の身勝手さ、無責任さ、沖縄の人々への差別、それらはどうして生じたのか、をきちんと分析しておく必要があります。それなしには、私達は、これからも何度も何度となく、沖縄の人たちや、そしてアジアの人たちへの加害をし続けるように思います。（田中 裕巳）　※『かりゆし』第10号（6月18日）より

### 3. 観劇『歌え、“愛”の子たちよ！』とその事前指導

夏休みに入る前の短縮授業期間中に、学校改革のテーマに関連した行事を持つことが、昨年から始まっていた。昨年の『黄色い扉』については、昨年度本校紀要の高木徹「『黄色い扉』の鑑賞について」が既にまとめを行っている。この年は校内教育研究委員会で、高2の沖縄研究旅行の第1回目の実施に合わせて、沖縄の混血児の問題を取り上げた青芸の『歌え、“愛”の子たちよ！』を観劇することに決定していた。

演劇鑑賞の日は7月9日であったが、その事前指導として6月28日(木)の“附属の時間”に、多少沖縄のことを学習してきた高2の生徒たちが、その成果を生かしながら、演劇の内容や沖縄の混血児問題、コザ暴動などの説明することになった。中心は高2の旅行委

員会のメンバーと各班の研究係とであったが、生徒たちにとっては、自分たちの今までの取り組み方、沖縄認識が試されるとあって、戦々兢兢であった。この辺りのことを私は学年だより『かりゆし』に次のように書いた。

### 高2の生徒達が“講師”となるの件

何のことだ？とお思いでしょうが、28日、木曜日の第6限…昨年まではクラブの時間でしたが、今年からは“附属の時間”として、クラブだけでなく、様々な行事の準備などにも使うことになりました…高2の生徒達が、演劇鑑賞のための事前指導として、他学年への講師団となるのです。中1から高3までの各クラスに2人づつ入る予定です。

話が回りくどくなりますが、試験明けの7月9日(月)、授業は第2限までで、全校で演劇鑑賞をします。場所は栄の県文化講堂、神戸の青芸という劇団の『歌え、「愛」の子たちよ！』。全校での演劇鑑賞は、昨年の『黄色い扉』に続き、年間行事となりつつあります。

“「愛」の子”とは、実は“あいのこ”という言葉にも通じます。舞台は沖縄、米兵との混血児達が主役です。第2次大戦後、米軍基地となってから、朝鮮戦争、ベトナム戦争などの度に沖縄の基地は“活躍”し、そして戦争のない平時においても、米軍の駐留は、沖縄の女性達を現地妻にしたり、一夜の性のはけ口にしたりしました。もちろん真剣な“愛”も“ホーム”も沢山あったでしょう。しかしながら、戦死したり、負傷してそのまま本国へ連絡無しに帰ってしまった兵隊は多く、その結果は、混血児の母子家庭の出現です。劇は1970年12月のコザ暴動の直後と、その10年後の混血児達の出会いと生きざまが中心です。コザは現在は沖縄市です。

高2は今秋、沖縄への研究旅行に出かける、という訳で、この劇への事前指導の役割をおおせつかりました。確かに今まで、『未来への証言』『琉子 白旗の少女』を見たり、『昭和史の中の沖縄』を読み（まだ全員とは言えないが！）、『沖縄の文化と歴史』の講演を聞いたりはしてきました。多少は勉強してきたと言うわけです。しかしながら、それだけでは、この劇の解説としては、一体何が言えるでしょう？

講師団は18人の研究旅行委員+各班の研究委員から12人の総勢30人です。先ず全員に劇の脚本を配布（すでに読んだはずですが？）、コザ暴動、1972年沖縄本土復帰、混血児問題などの資料を集めプリントを作成しました。今日明日でこのプリントを中心として、講師団の勉強会をやることになっています。他学年の生徒達に上手には説明できないかも知れません。しかしながらそのことをバネにして、自分達の研究旅行の研究

テーマを深めるというつもりで頑張って欲しいと思います。(田中 裕巳)　※第11号(6月25日)

### 高2の生徒達が“講師”となるの件(続)

先週木曜日第6限の“附属の時間”での高2の“講師陣”はなかなか立派でした。月・火の2日間にわたる講師陣の勉強会には欠席するツワモノが若干いて、顧問を心配させてくれましたが、旅行委員会で作成した資料がモノをいったようです。何はともあれ、資料を読ませるだけでも、2~30分はかかり、始まって10分くらいで立ち往生という講師は、どうやらいませんでした。

顧問はどうも悲観的な見方をしていたようですが、担任の先生方の評価はなかなか高かったようです。各クラス2人の講師陣の中には、自分達なりの“指導案”でユニークな“授業”が展開できたグループもいたようです。私も15クラス全部を少しずつ見て回りましたが、始めから上がってしまって何を話して良いのやら、という感じの“講師”は見あたりませんでした。みんなはっきり物を言う、現代っ子のようです。

勉強会でも、この点はしっかり指導できなかったことですが、中学校のクラスに入った生徒達は、少し戸惑いがあったのではないかでしょうか?特に中1あたりでは資料集の用語一つ一つが相当難解だったかも知れませんね。騒擾罪とか非摘出子とか“講師陣”も全員理解できていたかどうか、疑問も残ります。

教育実習生と同じような体験を高2でしましたと言うわけです。人に教えるということは、自分が分かっていないということを分かる機会だと思います。高2の生徒達の中には、日曜日にボランティアで中国からの帰国子女に勉強を教えているグループもあります。こういう体験が、本当に学ぶということの意味を痛感させてくれることでしょう。(田中 裕巳)

この生徒たちによる観劇の事前指導は、それを担当した生徒たちにとってどういう意味があったのでしょうか。上級学年である3年生のクラスに行かねばならない生徒たちは、いったい静かに聞いてくれるだろうかという不安を抱いていたようです。また同学年の高2のクラスでの説明はなれ合いにならないかどうか。こういった不安は余計な心配に終わりましたが、中学の低学年では、資料にある難しい用語など分かりやすく説明できない場合もあり、クラス担任の手助けもあったようでした。当日の体験を生徒の一人は劇を見たこととあわせてこう書いています。

#### 事前学習について

旅行委員で事前指導のためコザ暴動を自分で調べた

り台本を読んだので、見る前にだいたい内容がわかっていた。事前学習は、まず劇の回想の背景にててくるコザ暴動、それと混血児問題、あと店でやっていた沖縄ロック、最後に沖縄の日本返還を調べることから始まった。それをABCに分け、A組は日本返還、コザ暴動それと混血児問題について調べることになった。

僕はコザ暴動を担当し、先ず図書館へ行き沖縄について調べたが沖縄戦の本ばかりで、コザ暴動の本はなく、次に学校の図書館へ行ったがやはりこれもなかった。しかたなかったので、田中先生に「コザ暴動の本が見つかりません」と言ったところ、コザ暴動の本を持っているというので、借りて読んだ。本を読みながら重要なことをぬき出し、台本と見あわせまとめた。

すべて調べ、シナリオをつくってから、先生または調べた人がくわしいことを教える学習会を行った。

事前指導の日、朝から緊張し、どうしたらいいのかわからず、その日の授業はすべて、耳から耳へとつつぬけてしまい、事前指導をむかえた。今思い出すと恥ずかしいが緊張して足がふるえているのが自分でもわかった。しかし、緊張していないふりをしてシナリオを読むと何度もつかえ、説明しようとしたらまるで頭の中がまっ白になったみたいだった。このようなきちょうな体験をした劇だったのでどんな劇かと胸をわくわくさせて見ていました。なかなか感動したなあと自分では思い、事前学習をやってよかったと思った。(研究旅行委員長)

7月9日の観劇には保護者も200名余りが同席された。歴史的な背景はスライドを使いながら分かりやすく説明していたが、コザ暴動の時点と10年後の再会というシーンが交錯するため、中学生にはやや分かりにくいものであったかも知れない。しかしながら混血児への差別、特に黒人兵との混血児の場合の過酷さは十分に理解されたようだ。この観劇がきっかけとなって基地問題をグループワークのテーマとした班もあったようだ。

#### 4. グループワークへの取り組み

高2の研究旅行が“研究旅行”たる由縁は、広島・長崎の時代はもちろん、京都の時代も、その行程の中に、1日のグループ別の自主研究が行われてきたことが最大の理由である。この原則は沖縄研究旅行にも継続されなければならないと考えた。またこのことを意識して、例年高校1年での野外学習が、グループワークの準備としても取り組まれてきたのである。

沖縄でのグループワークのネックはその交通手段にあった。もちろんグループワークの範囲を那覇市内などと限定すればバスを利用できるであろうが、沖縄に

は鉄道がないため、中部から南部までと限定してもバス利用しかない。バス路線は経営会社によって入り乱れており、当然、生徒たちが行動する正午をはさんだ時間帯は本数も減少する。そこでタクシーの利用に踏み切った。

グループワークは3日目（11月21日）に、かりゆしビーチリゾート（恩納村）を朝8時30分に出発し、那覇のホテルに14時30分に着く6時間の行程で考えさせた。タクシー一台が6時間1万5千円と割高感があるが、効率的に動けるということと、その夜の発表会に備えて、グループワークのまとめをする時間を確保する、というのがスケジュール決定の理由であった。

グループワークへの取り組みは夏休み前から開始されていた。グループワークのテーマ、訪問先を決定し夏休み中に現地へ依頼の書状を出させるつもりであった。しかしながらそこまで進められた班はほとんど皆無であった。最大の問題は指導者の方にもあり、タクシーを利用した場合の所要時間についての助言がしっかりできなかったことである。「地図上の距離数でだいたい推測するように」という程度の助言しかできなかったが、この準備が予定通りに進んでいれば、生徒たちの作ったスケジュール表をタクシー会社（今回は個人タクシー協会、後述のように対応はとても良かった）に見てもらい、訂正してもらうこともできたと思う。実際に生徒たちの行程が出来上がって来るのは出発の1ヶ月ほど前になっていた。学年だより『かりゆし』第21号（10月8日）でそういった焦りの気持ちを私はこう書いている。

### “沖縄”まであと40日

沖縄の11月はどんな気候なのでしょう？沖縄の11月の月平均気温は22度となっていますが、名古屋で言えば、ちょうど6月と同じくらいのようです。9月の末くらいの感じでしょうか。多少暑い日もあるが、一番良い気候と言えるのではないでしょうか。

今年は台風の当り年で、あといつ台風が発生するのか分かりませんが、11月中旬は、おとなしくしていて欲しいものです。なにしろ飛行機が飛べなければ、旅行そのものが来年まで延期と言うことになるでしょうから。帰りに飛行機が飛べなかったらどうなるのでしょうか？もちろん天候待ちでしょうが、宿泊代がかさみますねえー。臨時便でも出してくれるのかなあ。生徒は大喜びかも知れませんが、担当者としては、想像もしたくありません。

グループ別の研究テーマ・行程等、しっかり出来上がっているところはまだ皆無。試験一週間前に入りますが、今週中に、グループごとに何度か集まって万全を期して下さい。  
(田中 裕巳)

この後、生徒たちは中間テストに入り（10月16日より5日間）、再びグループワークの準備は中断。本校隔年の行事である中等教育研究協議会（11月2日）も迫っていた。今回の研究協議会は教科外活動を中心とした発表の年で、高2の公開授業は沖縄研究旅行のグループワークについての学級活動となっていた。この日の公開授業について、私が担当した高2Cの様子を書いた学年だより『かりゆし』第25号（11月5日）の文章を引用しておこう。

金曜日の公開授業、私はC組を担当させてもらいました。担任の石博先生が、分科会からの“指令”（？）で、国際交流クラブを担当することとなり、副担任の私が代わって登場したという次第でした。副担任では日頃の接触の度合が少ないだけに、やりにくかった訳ですが（生徒の方もでしょうが……）、生徒たちのグループワークの現状と、沖縄研究旅行への“姿勢”をかいまみることが出来ました。

1班は「沖縄の方言について」。言語学関係の文献の紹介でしたが、沖縄県内で方言の違い、本島の南北での違い、方言の保存運動（笑築過劇団の人々の考え方）などをさらに調べて来ると面白いものになるでしょう。

3班は「壕の中での生活の現実を探る」。班員全員の登場での発表でしたが、そのまとまりの良さに感心しました。ただテーマから行くと、これからは「飲み水はどうしていたのか」「排せつ物はどう処理したのか」「利用された期間はどのくらいだったのか」「軍・民共用の場合、どのようなトラブルがあったのか」などの調べる項目を整理してみる必要があるでしょう。

4班は「米軍の実弾演習について」。馬淵君の一人舞台でしたが、自分の問題意識を班全員のものにして行く必要があります。テーマを絞りこんだのはよいと思いますが、実弾演習による恩納岳の様相の変化、それに伴う飲料水の汚染・土壤流失などを調べたり、名護の都市型ゲリラの演習場問題、北部のベトナム戦争時の密林型ゲリラ戦を想定した訓練場など、実弾演習そのものの戦略的意味を把握して欲しいと思います。

大学院時代からの友人のN君（柏山女学園高校）、今回平和教育の分科会で発表してくれた名古屋学院高校のI先生などが、授業を参観してくれました。どんな感想を持たれたか、お聞きするだけの時間的余裕がありませんでしたが、さらに事前研究を深めて欲しいと思います。今回発表をしなかった班も同様です。

こうして研究協議会での公開授業も無事に終わった。しかしながら沖縄への出発まで2週間余りと迫っていた。旅行の「しおり」はまだ完成していなかった。

遅れている最大の理由は、「しおり」に載せるグループワークの行程表がまだ出揃っていなかったからだった。研究旅行出発直前の学年だより『かりゆし』第26号（11月13日）に私はこう書いている。

### 沖縄でのグループワークについて（3）

研究旅行の「しおり」、旅行出発の2週間前には作り上げておこうというのが1学期の話でした。しかしながらグループワークのテーマとコースがなかなか決まらないという生徒側の怠慢、先日の研究協議会などにより仕事がなかなか進まないという顧問側の怠慢の相乗作用で、「しおり」の印刷所への入稿が土曜日になってしまいました。木曜か金曜にはてきて来ると思いますが、随分と遅れてしまったものです。

その問題のグループワークですが、3日目に実施します。恩納村のかりゆしビーチから那覇まで、直線距離にすれば60キロ足らずの行程で、観光タクシーを各グループ2台使用します。運転手はベテラン揃いでしょうから時間の判断などお任せする部分は多いと思います（予定のコースを全部こなせるかどうかなど）。しかしながら各グループの研究のねらいがしっかりとしないと、まったく運転手任せになるでしょうし、単なる観光めぐりになってしまふでしょう。運転手さんとの車内での会話も、もちろん沖縄の歴史や実態をつかむことになりよい勉強になることでしょう。しかし、それよりももっと大切なことは、各グループのテーマにそって、必ず誰かにお合いしお話をうかがって来ることです。「しおり」の原稿提出までに、その辺がまだ決定していなかった班は、出発までに必ず現地と電話連絡をし予約を取っておくことが肝心です。それが人に会う礼儀もあります。

とにかく本校にとって沖縄への研究旅行第1回の出発です。沖縄行きも教官会議ですんなり認められたわけではありませんでした。保護者の皆さんのお負担も今までよりもぐんと増えました。いろんな人たちが注目している中での出発です。細心の注意と最大の努力を發揮して、実りの多い沖縄研究旅行にしてきましょう。楽しむことも大いに結構、ただし人に迷惑をかけることだけは絶対にいけません。

【田中】

## V. 実施内容と問題点

### 1. 研究旅行の行程

《1日目》11月19日（月）

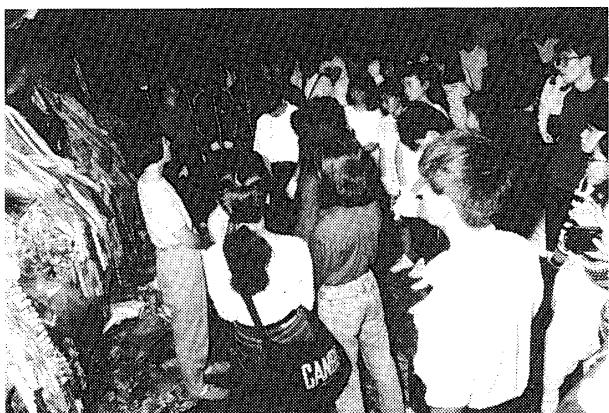
11:00 職員集合

11:15 生徒集合 名古屋空港

JAL カウンター前

11:30 班ごとに搭乗券の配布

	手荷物預かり手続き (搭乗待合室にて昼食可)
12:25	搭乗開始
12:45	名古屋空港発 全日空305便
15:10	那覇空港到着
15:40	琉球バス乗車（点呼）出発
16:40	アブチラガマ（糸数塙）到着



①アブチラガマで平和ガイドの宇根さんの説明を聞く生徒たち



②アブチラガマでの平和セレモニー：  
「平和の誓い」を読む代表生徒



③ひめゆり学徒上原当美子さんの講演会

平和ガイドの会宇根悦子さんの案内  
 17:30 同上 発  
 18:30 那霸セントラルホテル着  
 19:00 夕食  
 20:00 講演 ひめゆり同窓会 上原当美子さん  
 21:00 班長会議  
 23:00 点呼・消灯・就寝

〔第1日目の反省事項〕

- ①空港への大幅な遅刻者がいたこと。  
→一人ひとりの空港までの交通手段・同行者を事前に調べておく必要があった。
- ②待合室で搭乗券を紛失した生徒がいた。  
→結果的には乗れたが、事前にしっかり注意する必要あり。
- ③機内で数人でトランプをしたり、歩き回り、他の乗客から苦情が出た。  
→新幹線に乗っているような気分の生徒がいた。機内のマナーも“常識”を信用せずにしっかり事前指導すること。
- ④アブチラガマに懐中電灯を持ってこない生徒がいた。  
→絶対に危ない。事前に（バス内で）チェックする必要あり。1班に1つくらいはサーチライトも欲しい。
- ⑤消灯後、部屋同士の電話が多かった。  
→ビジネスホテルでは部屋同士の電話は切れない。事前に注意していても絶対にあるから、むしろ部屋に電話のないホテルを選ぶ必要があり。

## 《2日目》11月20日（火）

6:00 起床  
 6:30 朝食（バイキング）  
 ~7:10  
 7:30 那霸セントラルホテル発  
 バス3台分乗 平和ガイドの会 A組に村上有慶氏、B組に金城メリーサン、C組に大野實久氏  
 8:00 嘉数高地着  
 8:40 同上 発  
 9:00 嘉手納基地（安保の見える丘）着  
 9:20 同上 発  
 9:45 読谷村着 この後、クラス別行動  
 A組 座喜味城跡→トリイ通信基地→チビチリガマ  
 B組 チビチリガマ→座喜味城跡→トリイ通信基地  
 C組 トリイ通信基地→チビチリガマ→座喜味城跡

11:30 同上 発  
 12:00 東南植物園で昼食  
 13:30 同上 発  
 14:30 かりゆしビーチ着 グラスボートとビーチ散策  
 15:20 同上 発  
 15:30 かりゆしビーチリゾート着 各自部屋に入り荷物整理、自由行動  
 17:30 夕食（バーベキュー）  
 21:00 グループ研究の打ち合せ 班ごとに  
 21:30 班長会議  
 23:00 消灯・就寝

## 〔第2日目の反省事項〕

- ①嘉数高地の見学時間が短かった。  
→バスの駐車位置が予想よりだいぶ離れていたこともあり、歩くのに時間がかかった。普天満基地を見て、京都の塔などの話を聞くには1時間は必要だった。この誤算が、以後の行程に混乱をもたらした。
- ②時間不足から安保の見える丘を午後に回さざるを得なかったクラスもあった。  
→この辺は平和ガイドが柔軟に処理してくれて助かったが、行程的に少し欲張りすぎた。
- ③トリイ通信基地はゾウの檻にすべきだった。  
→バスの中だけの説明に終わってしまい、BとCがチビチリガマで重なってしまった。
- ④チビチリガマでの予定の打ち合せ不足。  
→知花昌一氏とは現地で会うことになっていたが連絡が不十分で、お話を開始が遅れてしまった。現地の小学生たちもたまたま来ていて、知花さんの話が残念ながらじっくり聞くことが出来なかつた。
- ⑤東南植物園をもっとゆっくりみたいという声もあった。  
→ほぼ昼食の場所と考えていた。3台のバスの時間調整の場所にはなった。
- ⑥かりゆしビーチでの水泳。事前に膝くらいまでの遊び程度以外はダメと注意していたにも関わらず、自由時間中にビーチまで泳ぎに行った生徒が20名あまりいた。  
→担任団が打ち合せをしているスキを突かれた感じで、担任団が全員一ヶ所に30分余りも集まっていたことを反省しなければならない。泳いだ生徒の感想も「サンゴが足に痛かった」。クラゲに刺された生徒もいて気温的には問題なかったが、水泳には慎重に対処する必要がある。
- ⑦消灯後の部屋同士の電話は前日同様であった。  
→夕食をバーベキューにしたため、全体のミーティ

## 高2沖縄研究旅行初年度の実践について

ングをやれる部屋がなかった。そのため全体への注意が不徹底になった。

### 《3日目》11月21日(水)

6:30 起床  
7:00~8:00 朝食(バイキング方式)  
8:30 かりゆしビーチリゾート発  
各班タクシー2台に分乗  
12:00 那覇に電話連絡、途中適当に昼食  
~13:00  
14:30 那覇セントラルホテル着  
夜の発表会のための準備  
16:00 国際通り自由散策  
18:00 自由散策終了  
18:50 夕食  
~19:20  
20:00 グループワーク発表会  
~21:30  
22:00 班長会  
23:00 消灯・就寝

#### 〔第3日目の反省事項〕

①各ルームのタオル、スリッパなどの整理の悪い班が



#### ④グループワーク中の生徒たち……C組6班



#### ⑤グループワーク研究発表会で……C組6班

あった。

②昼の那覇への電話連絡は不要だった。

→今回は個人タクシー協会が全面的に協力してくれた。各車無線があり、タクシー協会の方にも連絡係がおり、緊急時の連絡体制が整っていた。案内、車中での説明なども好評であった。

③発表のための準備作業の場所の問題

→那覇のホテルはツインを中心としたビジネスホテルのため、準備作業の場所が不足していた。

④自由散策時の安全対策

→当日も暴力団の発砲事件があり、翌日にはアルバイトの高校生が流れ玉に当たって死亡するというくらいに、暴力団の抗争が激化していた。暴力団の事務所がホテルの至近距離にあり、機動隊による警備体制が取られていた。迂回するよう指導したが、このような条件のもとでの自由散策には問題があったかも知れない。(本節末の記事参照)

⑤発表会の採点準備など

→グループワークの発表会は大いに盛り上がった。引率担任組が評価採点をしたが、評価の基準などを前もってきちんと決めておくべきだった。おおまかな基準でも上位3班はほぼ全員一致していたが。

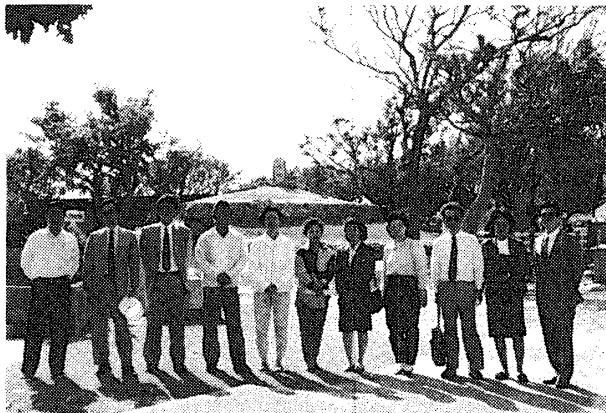
⑥消灯・就寝後の電話・部屋移動が多くかった。

→4Fにまたがっていたため掌握は難しかった。

### 《4日目》11月22日(木)

6:30 起床  
7:00 朝食(バイキング方式)  
~8:00  
8:20 那覇セントラルホテル発  
バス3台分乗 平和ガイドの会  
A組に金城メリーさん、B組に村上有慶氏、C組に宇根悦子さん  
9:20 韓国人慰靈塔着  
9:40 同 上 発  
9:50 県立平和祈念資料館着  
10:50 同 上 発  
11:10 魂魄の塔着  
11:30 同 上 発  
12:00 琉球ガラス村着 昼食  
12:45 同 上 発  
13:00 ひめゆりの塔、ひめゆり平和祈念資料館着  
14:00 同 上 発

- |       |        |
|-------|--------|
| 14:50 | 那覇空港着  |
| 15:50 | 搭乗     |
| 16:00 | 那覇空港発  |
| 18:00 | 名古屋空港着 |
| 18:20 | 集合、解散式 |



⑥魂魄の塔にて職員の記念写真……左から4人目村上先生、5人目宇根先生、6人目金城先生が平和ガイドの先生方。11月22日

〔第4日目の反省事項〕

①朝食にかなり遅くきた生徒がいた。

→4日目となり、疲労の蓄積で行動がスローモーとなってきている。出発時間の遅れにつながった。

②県立平和祈念館での見学・セレモニーについて

→10分くらいで一巡してしまう生徒がいた。証言の部屋でもっとじっくり読んでほしかった。見学前にセレモニーを持ち、生徒挨拶と歓迎（チビチリガマに千羽鶴を持っていったが、宇根さんの助言で千羽鶴は平和祈念館に差し上げた）、平和メッセージをお渡しした。チビチリガマでの『平和のための誓い』も大きな字で書いて渡して来るべきだった。

③魂魄の塔の見学について

→魂魄の塔では3クラス合同で村上先生の説明を聞いた。時間が余り荒崎海岸に下りた。これは最初から行程に入れておいたほうが良かった。沖縄の海に触れるという点では、こちらの方が自然のままでよい。

④琉球ガラス村での買物に時間を取られた。

→2日目の東南植物園同様レストランのみの利用のつもりにもかかわらず、生徒の意識としてはおみやげも買いたいらしい。このへんを認めるならばもう少し時間がいるし、難しい。レストランのみの施設があれば良いのだが。

⑤ひめゆりの塔等での時間不足。

→平和ガイドの会との打ち合せ不足から、ひめゆり

の塔前での説明が長くおまけに良く聞こえなかつた(ここではマイクは使用禁止)。記念写真にも手間取った。なにしろ観光コース化されているので、時間は多めに取る必要がある。ひめゆり平和祈念資料館では宮良ルリさんが急に説明して下さることになったが、一部の生徒しか聞くことが出来なかつたし、時間も足りず途中で打ち切つていただく失礼をしてしまつた。

⑥平和ガイドの会の方たちへのお礼の挨拶

→いちおう琉球ガラス村の駐車場でお礼とお別れの挨拶を旅行委員会から行つた。那覇空港まで送つて下さることであったので、空港で正式な最後の挨拶を生徒にさせようと考えていたが、適当な場所が全くなかった。

⑦名古屋空港での解散

→出発時と同じ場所で解散式を行つた。解散後の生徒たちの帰宅は、バス利用組は早かったが、親が車で迎えに来る場合、ラッシュ時と重なり一時間以上も待つっていた生徒がいた。 【田中】

## 2. コース設定の理由

### (1) 平和学習

① 平和ガイドさんは (a) ガマ（糸数塙）の案内人であり (b) バスに一日同乗して車窓に見える、基地の島、沖縄の生活の現実を丁寧に説明しながら、見学地についての過去、現在を説明してくれる人であった。生徒との心のこもった交流が生まれた。

#### A 戦跡コース

沖縄戦の追体験。ひめゆり平和祈念資料館や県立平和祈念資料館  
……二つのガマの比較

#### B 基地コース

沖縄の生活の現状を知る。騒音問題、基地問題  
……嘉数高地、嘉手納基地、象のオリ

#### ②講演者

A 上原さん ひめゆり学徒隊の生き残り  
(戦争体験談)

……宿舎で

上原さんの話は40分超過。戦争体験談は短い時間では話せない。十分な時間を確保する必要がある。生徒は長時間であるにもかかわらず、水をうつたように聞いた。

B 知花さん 集団自決 日の丸訴訟

……チビチリガマで(現地)

知花さんはガマが小さいので3クラスをそれぞれに説明。11月は他の見学者（小学生の遠足）もあり混雑。二つのガマ（1日目のアブチラガマと2日目のチビチリガマ）を比較して見学できるのはよい。生徒の感銘

は深い。

#### C 宮良ルリさんの説明

##### ……ひめゆり祈念資料館（見学時）

平和学習は第一日目のアブチラガマでの平和セレモニー（資料1参照）で始まり、その夜のひめゆり学徒の上原さんの戦争体験談に続いた。そして、第二日目の基地コースと第四日目の戦跡コースに続き、ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館で終わった。生徒達は第四日目の県立平和祈念資料館で平和メッセージ（資料2参照）を渡し、証言資料を読んだ。またひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館でも真剣な目で、くいいるように見た。どちらでも「見学時間をもっと欲しい」と多くの生徒が訴えた。「ひめゆり」の見学は四日間の行程のすべてが凝縮したかのような、一人一人の「平和について」の自分のおもいを見つめた時間であった。

#### （2）自由研究

タクシー2台に分乗するグループワークで、各自、自由にテーマを選び研究する。（資料5参照）タクシー利用のグループワークは（a）個人タクシーの運転手の協力で研究を深めることができたし（米軍基地内の見学等）（b）危険防止の役割や昼食場所の確保等で安心であった。

第三日目のグループワークについての生徒の感想は「ホテルへの到着が遅れて叱られたけれど一番楽しかった。研究旅行だという気がした一日だった。充実していた。お菓子もいただいたし、紅型もやらせてもらえたし本当によかったです」「米軍兵士に英語でインタビューしたのはよい経験だった」「いろいろな墓に案内してもらった。びっくりすることばかりだった」「読谷村のリゾート開発がよく分かった」「沖縄タイムスで親切にしていた」と等さまざままで、有意義なものが多かった。（資料6参照）

#### （3）その他

##### ①グラスボート

紺碧の海とカラフルな魚を見て「ポスターでみた沖縄に初めて出会った」と一人の生徒は言った。歓声があがり男子の何人かは海に飛び込んで泳いだ。「本当にきれいね」と海のきれいさを実感できたがリゾート開発をグループワークのテーマに選んだ生徒は「赤土がいけないのでよくなっているのに気づき、海の汚染を自分の目でたしかめたのである。

##### ②国際通り散策

夜の研究発表会の準備を終えて、夕食までの限られた時間を利用しての散策であった。暴力団組事務所が近くにあることを心配したが沖縄の繁華街の雰囲気が

実感できた。牧志公設（市場）ではめずらしい沖縄の食物を見ることができた。平和ガイドの方に出会ったグループは案内をしていただいた。また土産を買う時間でもあった。

#### （4）現地における実施内容の変更点

##### ①かりゆしひーで泳いだこと

ビーチで泳ぐことは教官会議で旅行時であり生徒の安全性と健康面への配慮から禁止とした。しかし、グラスボートへ乗船する時、それを忘れて飛び込んだ生徒が出た。そして、その日の夕方、自由時間の時プールで泳ぐ計画の生徒達がビーチへ無許可で泳ぎに行つたことが、後から分かった。ビーチには監視人がいたがクラゲに刺された生徒もいて、ビーチで泳がせるることは迷うところである。

##### ②荒崎海岸見学

4日目の午前の行程は昼食時間のための時間調整で、県立平和祈念資料館のすぐ近くにある荒崎海岸へ下りた。沖縄戦の上陸地点の話をききながら戦争中の遺品を拾ったり、貝拾いをするのは天気に恵まれれば是非計画の中に入れたい場所である。

### 3 問題点

#### （1）航空機が中便であること

名古屋空港への集合には余裕があるが、中便であると第一日目の行程でアブチラガマにしか入れないので、全体の計画に影響する。第1便であれば第一日にひめゆり平和祈念資料館や県立平和祈念資料館を見学できるし、アブチラガマも通り抜けが可能になる。

#### （2）沖縄バスが使えないこと

沖縄で平和学習をしている高校がよく利用するバス会社である。バスガイドさんが平和学習としての自覚を持ち高校生に接している会社である。今年は利用出来なかつたが、早めに申し込んでおくとよい。

#### （3）宿泊施設について（ビジネスホテル、リゾートホテル）

那覇のホテルはビジネスホテルが多い。会議室がないので使いにくい。

また、リゾートホテルは施設や環境面において那覇のビジネスホテルとくらべ立派で充実しているので、宿泊場所としては3泊の内、2泊をリゾートホテルにするといい。しかし、ここも会議室がないところが多いので、問題は残る。

【斎藤】

## V 事後指導

### 1 グループワーク発表会の発表資料（B紙）の展示

…図書館廊下

現地でのグループワーク発表会はその日の夜と

いうこともあり、他グループの内容に興味が持てるし、例年活発な発表会になる。しかし18グループを1班5分としてもなかなか時間が伸びたりして、グループの研究の充実度に比例してもっと時間があればという不満が残る。現地での短時間の発表会にも意味はあるが、学校にもどって来てから発表資料のB紙作成や研究集録のまとめに十分な時間をとり、発表会を持つのが考えられてもよいだろう。

現地での写真や、資料の精選と選択等、落ち着いてやることができる。

## 2 「研究集録」作成のために

- ①アンケート（詳細は「研究集録」参照）
- ②一口感想（全員）
- ③感想文（全員）
- ④お礼の手紙（資料3、4、7参照）
  - 平和ガイド（全員）、個人タクシーの運転手（グループで）、講演者（知花さん、上原さん）
  - 各グループワークの訪問先（グループで）
- ⑤グループワーク研究のまとめ

## 3 沖縄研究旅行報告会

附属の時間に中1～高1のHRで（1.24）

各グループがグループワークの研究内容を中心に沖縄研究の感想を交えて報告をした。

来年度沖縄へ行く高1の各クラスへはグループワーク発表会の優秀グループが、オリエンテーションを兼ねて説明。

## VI 生徒の意識の変化

事後アンケートと生徒感想文より

（1）学習面で最も印象深かったものとしてあげているのは次のものである。

	男 子	女 子
一位	アブチラガマ	アブチラガマ
二位	ひめゆりの塔 ひめゆり平和祈念資料館	ひめゆりの塔 ひめゆり平和祈念資料館
三位	嘉手納基地	県立平和祈念資料館
四位	チビチリガマ	チビチリガマ

第1日目に那覇空港から直行したアブチラガマでの体験は、第4日目最後のひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館の宮良さんの話につながり強い印象を残した。

多くの女子生徒が次のような感想文を書いた。

### 漆黒の闇 ガマで

高2A 高木真理子

「青い空、とても11月とは思えない太陽の光、那覇空港から乗ったバスの中から見た沖縄はキラキラして

いました。バスを降りて、草むらの細い道を入ると、まっ暗な穴が開いていました。このアブチラガマは、一歩入ると、周りが何も見えません。ずっと奥の方へ入っていき、壕内で平和セレモニーと平和ガイドの方の話を聞きしました。壕内は、暗いだけでなく、足場も悪く、水滴も落ちてきたりして、ひんやりしていました。壕内で、皆一斉に懐中電灯を消した時は、自分が目をつむっているのか、開いているのかさえわからない暗さでした。こんな中で、たくさんの傷ついた兵士がうめき、その間を女学生の方々が、必死に看護にあたっていたのだと思うと背すじが寒くなり、隣にいる友達の存在を確かめずにはいられませんでした。本で読んだりするだけでは、当時の様子の10分の1も理解できないのだと、この時つくづく感じました。

また、ひめゆり平和祈念資料館でお聞きした、当時のひめゆり部隊の方のお話は、本当に胸のつまる思いがしました。壕の実物大の模型の前で、その時のように浮かべながら話してくださった声は、所々悲鳴にさえ聞こえました。時間の都合でお話が途中で打ち切られてしまったのがとても残念でした。来年行く人達は、十分に時間をとっておくとよいと思います。お話を聞いていると、アブチラガマのようすも重なって、涙が出そうになりました。最後に交わした固い握手を忘れることができません。

事前学習の成果もあって、充実した4日間でした。この研究旅行で学んだことを、これからに生かすよう努力したいです。」

さて、第2日目の嘉手納基地と知花さんに案内してもらったチビチリガマについては次のように受けとめている。

### 基地の島—沖縄

高2C 柴田久美子

「今回の旅行は、実り多かった。第一に、戦争のことをくわしく知ることができたということ。話や本で得たボンヤリとした知識が体験者の実話とガマで、はっきりとしたように思う。そして現在の沖縄の状態。

“基地の島”と呼ばれるのも納得できるほどの広い土地をアメリカに占領されている。あちらこちらを戦闘服の米兵が通り、ジェット機が大音響と共に頭上をかすめる。慣れる、慣れないなどの問題ではない。更に、私達の班の研究テーマであったリゾート開発。水の問題や赤土汚染でかなりのトラブルが起こっている。私は生まれて初めて沖縄に行ったのだが、なぜか沖縄らしくない沖縄ができつつあるような気がしてならなかった。

沖縄の人はみんな、あたたかかった。きっと名古屋であんな人々に会おうと思って、無理だろう。

そしてチビチリガマで、私は泣いた。村上さんの話を聞いて。戦争中に母親を殺した男性は言ったという。「殺してやることが、最高の愛情だった」と。涙がとまらなかった。そんな形でしか、肉親を愛せなかった。死と愛がイコールで結ばれた時代があった。悲しすぎる事実である。

この学校の旅行が、研究旅行で良かったと思う。もしも、修学旅行だったら、この旅行はこんなに充実したものにはならなかっただろう。高校時代の最高の思い出になる、研究旅行だった。来年もぜひ、沖縄へ行って欲しいと思う。」

### 沖縄で思ったこと

高2B 鬼頭美穂

「3泊4日の沖縄研究旅行もとうとう終わりました。1年生の終わりにこの話が出てきてから今日まで長かったけれど何だかあっという間だったような気もします。

何が一番印象に残ったかと問われると、私は地下に弾がある草ぼうぼうの、さくがなければそうとはわからない基地の敷地でした。基地は皆地上にあるものだとばかり思っていました。又、通信基地のミラーガラスも同じような印象を受けました。戦争のためのものです。常識で判断できる訳がないのです。

ガマは事前にあまりにそれについてショックを受けることを聞いていたので、それほど衝撃を受けることはありませんでした。それよりも私はチビチリガマでお話を聞いた知花昌一さんが想像していたよりずっと若い人だったのに驚きました。私は当然戦争を経験している人だと思っていました。そうだからこそ、あの国旗をおろしてしまう事件が起きたのだと考えていました。知花さんは一生懸命ガマについて、集団自決について話して下さいました。私は自分が恥ずかしかったです。戦争のいたみを受けついで平和をとくのは私達若いものであるべきはずなのに。

平和ガイドの人が歌ってくれたいつかの歌のうちの一つに「さとうきび畑の歌」がありました。その歌詞に、「遠い海の向こうから戦争がやって来た」ということばがありました。考えてみれば沖縄は犠牲の町です。薩摩藩から圧力を受けたときから、彼らの平和な島はそうなっていったのだと思います。

今度の研究旅行で、観光客でにぎわう所へ行ったのは2、3ヶ所でした。戦争美化のため政府がかくしてしまう沖縄の地をたくさん見てくることができました。事前学習が役に立つことがしばしばありました。タクシーの運転手さんもいろいろお話ををして下さいました。たくさんの人達に支えられて私達の研究旅行を無事終えることができました。それにふさわしい研究旅行の成果をあげたいと思います。」

(2) グループワークの取り組みについては、次のようにであった。( )内の数字は事前研究の時のもの

	男 子	女 子
熱心に取り組む	58% (33)	48% (28)
普通に取り組む	32% (18)	40% (23)
あまりやれなかった	10% (6)	4% (2)

「グループワークが一番良かった」という意見が結構多く、充実感を残した。

(3) 沖縄研究旅行は自分の考え方や生き方に影響を与えたかということについては、ほとんどのものがなんらかの影響を与えられたと答えている。

	男 子	女 子
大いに与えた	32%	49%
少し	49%	45%
計	81%	94%

高2Cの荒井剛は旅行直後の感想文で次のように書いた。

### 沖縄から帰ってきて

「研究旅行の事前学習で沖縄戦のことばかり取り上げることにはぼくは疑問を持っていた。だから、過去のことより現在、未来のことを、と言ってきた。理由は一つ、過去はどうすることもできないからである。どんなに沢山の資料を見ても、どんなに考えてみても死者は帰ってこない。そして調べれば調べる程でてきて、とどまる事を知らない眞実に徒労感を味わう。そんな徒労感を味わう度にでてくるこれでよいのか、という疑問。ぼくは思いついた。それなら、現在、未来の方へと目を向けようと、どうしたら米軍基地はなくなるのか、日米安保条約に対してどういう見識を持てばよいのか、世界に平和をもたらす為に自分はどういう行動をとればよいのか、等を考えた方がよいのではないかという結論に達した。沖縄に来て自分のこの疑問に対する答が出た。と同時に安易にこんな結論を出してしまった自分の甘さもわかった。平和を望むのならあらゆる戦争も理解しなければならないということを。戦争とは適応する形容詞がない程、この世にあるどんな言葉を使っても表現できないものだということを。今までぼくは100%理解しようとした。その結果、眞実の数ばかりにこだわり続け、その眞実の本質にせまろうとした。でも沖縄で眞実の本質のいくつかに出会った。その中で一番衝撃を受けたのが初日、上原さんのおっしゃられた次の話である。「苦しんでいる友、親、子を殺してやるのが当時の愛であり、皇民化教育の下での最高の愛情表現であった。」この時ばかりは、光と影が、正と負が一瞬にして反転するかのようなショックを受けた。今でもこの言葉を

忘れることができません。ほくは、戦争を経験していないからこそ、そして100%戦争を理解することは不可能だからこそ、あらゆる角度から戦争について吸収する必要性を感じました。沖縄での何にもかえることのできない4日間と同時に次の言葉も心のどこかに残しておきたい。

“過去を忘れる者は、もう一度それを繰り返す運命にある”

第二次大戦の最中に、大著「戦争の研究」を書いたQ・ライトが「戦争を防ぐためには、戦争を解明しなくてはならない」と論じたと同じように、荒井は四日間の沖縄への研究旅行での体験を通して、戦争を繰り返してきた人間社会にとって、さまざまな角度から多岐にわたって戦争を解明することが、平和を考える第一歩だということに気づいた。

そして、表現こそ違うが、同様の感想を多くの生徒が持ったのである。

## VII 今回の取り組みと今後の課題

### 1 平和学習とグループワーク研究の関連性について

グループワークの研究テーマの選択方法は附属の研究旅行で従来実施してきたように自由選択である。方言 葬儀 紅型 米軍 実弾演習 琉球王朝 バイナップル 塙の生活 等のテーマが幅広く選ばれた。例えば、A組5班は「沖縄の宗教と葬儀」というテーマで読谷民族資料館の学芸員、泉川さんから話を聞き案内をしてもらった。その後、研究集録を送付して、「案内した時の熱心さに感心しましたが、報告集の研究テーマの幅の広さにも関心しました」との手紙をいただいた。

だから、グループワークの行程には平和学習として全体で見学したところはコースになるべくいれないよう指導した。

しかし、中には内容を深めることができず、観光地を見学しただけのグループもあった。

今年度のようなやり方ならば、グループワーク研究をより充実するために次のことを徹底させたい。

(a) グループワークの研究テーマを早く決める。  
現地との連絡に時間がかかる。遅れると電話代がかかる。

(b) グループワークは現地に連絡し、じっくり話を聞く場所をグループワークの行程の中に必ず1ヶ所は入れさせる。

また、第3日目のグループワークの研究テーマの選び方を全体コースでの平和学習と関連させて選ぶことも一つの方法であろう。グループワークの行程を全体で回る基地コース戦跡コースの発展学習として考えるのである。その場合、半日は学習としてとらえるが、

残りの半日は観光（万座毛や流球村等）ということでバランスをとる必要はあろう。

### 2 平和学習への取り組み方

#### (1) 各教科（世界史、国語、英語、理科、音楽、家庭等）の総合的な事前学習

例えば平和ガイドの金城メリーサンに「沖縄のうた」のテープをいただいた。「芭蕉布」等の歌謡を覚えて旅行に臨むのも楽しい。

また日本一の長寿県である「沖縄の食事」を家庭科で扱うこと等は牧志公認の見学を行程の中に入れればよりその理由が実感できるであろう。

#### (2) 現地での平和学習時にフィールドノートを持つ

今回は初年度であり、副班長が各見学場所についての見学ポイントをまとめたプリントを持ったが、事前学習として全員が購入した『観光コースでない沖縄』(高文研)をテキストとして、「フィールドノート」を全員が持ち、平和学習の視点を各見学場所で確認するとよいだろう。

#### (3) 沖縄研究旅行で生徒一人一人が何を見いだすか、という問題意識の確認。(旅行全体のスローガンづくり)

旅行直後に書かれた「感想文」を読むと4日間の「沖縄研究旅行」が、生き方や自分の考え方へ影響を与えた、あるいは心がゆさぶられたという感想を書いている。それは生徒1人1人が現在の高校生活を自覚的にみつめ直す作業であろう。視野や知識を広げ、深めるのは高校生が問題意識を自分自身の生活の中へとり入れた時、大きく育ち始めるそういう観点を1人1人の気持ちをまとめたスローガンとして学年でつくってみてもよい。

### 3 レクレーション、娛樂的計画

今年度実施した 国際通り散策、グラスボート、(海で泳ぐ) 以外では、ビーチ(雨天の場合は部屋)で夜、クラス(グループ)ごとにミーティング(一日の感想を話し合う)を開くことや演艺大会とかが考えられる。

平和学習ばかりでは緊張するので地域の特質や施設や会場との関連を考慮したレク計画を入れたい。

### 4 中3の広島旅行から高2の沖縄研究旅行へのつながりと発展性

中3で広島での平和学習をした1991年度の生徒たちが高2になって沖縄でどのような平和学習をするかについてはこれからである。「沖縄から見ると日本がよく見える」といわれるよう東アジアへの視点を学んでこそ、「平和教育と国際理解の教育」を位置づけることができる。

【斎藤】

## 高2沖縄研究旅行初年度の実践について

### 【資料1】《第1日目のアブチラガマでの宣言》

#### 平和のための誓い

私達、名古屋大学教育学部附属高等学校2年生は、本校の伝統ある行事、研究旅行として、今日初めて沖縄の地に立ちました。

私達は、この一年間、全員で「未来への証言」や「琉子 白旗の少女」を見たり、各グループ毎に沖縄の文化・歴史について事前学習をしてきました。名古屋から沖縄はあまりにも遠く、グループワークの連絡などには様々な障害があり、途方にくれることもありました。しかしながらそういう中で、戦争の悲惨さ、現在の沖縄の置かれた状況の厳しさなどを少しづつ理解できたように思います。

沖縄では唯一地上戦が行われました。この地で、そしてこのガマでも、多くの方々が亡くなられました。沖縄住民は、老いも若きも男も女も、総力を上げて日本軍に協力しようとしました。その沖縄の住民に対して、日本軍は背筋の凍るような冷酷な仕打ちをしたと聞いてきました。戦後、30年近くたって生まれてきた私達には想像することさえ出来ませんでした。

私達は戦争をまだよく知りません。今の若者たちが、戦争を知らない今まで一生を終えることが出来れば、それはどんなに幸せなことでしょう。しかしながら、この地球上には、戦争につながる火だねが、いまだにあちこちにくすぶっているように思います。日本国憲法は平和憲法であると習ってきましたが、現在の政府は“平和”という名のもとに、再び国民を戦争に巻き込もうとしているように思えます。

過去の残酷な事実に目を覆ってしまうことは、恐ろしいことだと思います。戦争というものが、いつの間にか、美しく、雄々しいイメージで包み込まれてしまつてはなりません。この沖縄の地で、戦争はどのように展開されたのか、人々の命をどのように奪い、人々をどのように憎しみ合わせたのか、本当のことを知りたいと思います。私達は、戦争の恐ろしさ、残酷さを、しっかりと心に刻み込みたいと思います。

そして、唯一の地上戦が展開されたこの沖縄の地が、戦後45年間、アメリカ軍の基地の島となってきたことの意味も、深く考えて行きたいと思います。沖縄は、日本の歴史の中で、常に、本土の安全や経済的繁栄のための犠牲であったように思います。

私達は、今日からの4日間、沖縄で見ること、聞くことのすべてを、今後の私達の人生にいかし、人が殺しあったり人を差別したりすることのない、真に平和な世界の到来に貢献できる人間になりたいと思います。

アブチラガマにて

1990年11月19日

名古屋大学教育学部附属高等学校2年生一同

代表 荒木英二

### 【資料2】《平和メッセージ》

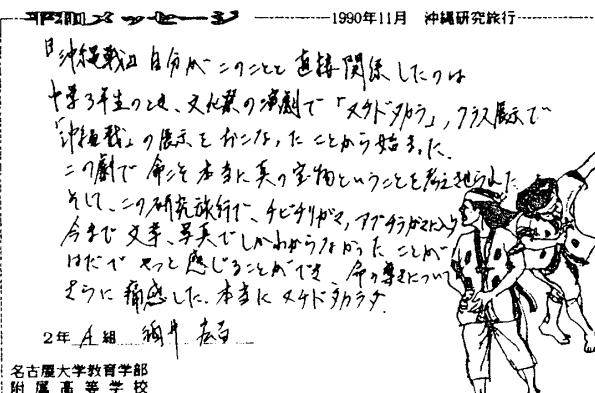
・・・第4日日の県立平和祈念資料館で、沖縄での平和学習の成果として前日までに全員がホテルで書いた平和メッセージをお渡しした。このページの写真にあるような用紙(B5の半分)を用いた。・・・

・「座喜味城跡の石垣に登ったとき、とてもきれいな景色だった。しかし、どの方角を見てもアメリカ軍に関係する建物が、建てられていました。畑の下に掘られている弾薬庫、つねに飛行機が飛びたっている基地、どんな情報でもキャッチすることのできる所 etc……。まのあたりに見ました。学校の隣に平然と建てられている基地には大変おどろきました。」(西尾麻由)

・「2日目、平和ガイドさんとチビチリガマへ入った。小さく石で囲った中に骨が散在していた。大きな骨、小さな骨。たくさん、たくさんあった。さびたカマや包丁がいたるところにおかれていた。当時10代で実の母の首をしめて殺した男性は、法廷に立ったときにこう言ったという。『それがその時にできる最高の愛情だった』と。涙があふれてとまらなかった。どんなにつらかっただろう。家に帰ったら母の肩をたたいてあげよう。」(柴田久美子)

・「僕は戦争で死にたくない。だから今の平和は貴重だと思うし大切にしたい。沖縄の悲劇が最後の悲劇となるように努力したい。」(小野省悟)

・『百聞は一見にしかず』というが、そのとおりだと思う。この研究旅行の前に沖縄についての本を色々読んだが、旅行で見てきた壕や、その中で聞いた戦争の話などにかなう本はなかった。また平和ガイドの人の話を聞いていて強く思ったことが2つある。1つは、もっとも悲惨な戦場だった沖縄に基地がたくさんある



《平和メッセージ》

という矛盾、それと、日本政府の沖縄や、戦争に対する姿勢が根本的には、戦後と戦前あまりかわっていないということである。とにかく20才になったら冷静な目で日本（だけ）でなく世界をみて、選挙権行使したい。」

（浅井順）

・「私は沖縄の研究旅行を通して、今まで当り前だと思っていた平和であるということが、大変な犠牲の上に成り立っていることを知りました。戦争経験者の方などのお話を聞いて、“かわいそう”とか“気の毒だ”とかいう気持ちよりも、戦争の本当の恐ろしさを知らずにいた自分が、戦争で亡くなった人々に対してすごく後ろめたい気持ちになりました。その気持ちからかもしれないけど、もっと沖縄を知り、私なりの“平和”ということの意味を考えたいと思います。」

（安田友美）

#### 【資料3】《平和ガイドの先生方へのお礼の手紙》

・・・研究旅行から帰ってきた直後の11月24日、平和ガイドの先生方にお礼の手紙を全員が書き、まとめてお送りした。以下はそのうちの一部である。・・・

・「大野さん、いろいろとありがとうございました。たくさんの貴重なお話をきかせていただいて、本当に感謝しています。今までどちらかというと本土では、戦争といえば広島、長崎などの原爆などがまずイメージとして克明で(少なくとも私の周りでは)“被害者の”な戦争が頭にあったような気がします。でも、いちばん大切なのは、日本人が犯した数々の非道なことを明らかにすることです。とくにこれからはどんなにかわいそうでも子どもたちにきちんと日本人のしたことを教えるべきだと思いました。平和ガイドの人の話、ひめゆりの生き残りの人の話などは、かなり心にズーンときました。今まで、いろいろと戦争の本をよみましたが（こわいことに）あまり感じませんでした。しかし今回はかなり考えさせられました。本当に、すばらしい話をありがとうございました。」

（北沢尚美）

・「金城さんへのお礼の手紙 今回の沖縄への研究旅行へ行って、事前学習で沖縄戦のことについて、いろいろ話は聞いていたけれど、やはり現地で、その場その場に行って、話を聞いていると、深く心をつくものがありました。平和ガイドの3人の方々のお話を真剣に聞いていましたが、まだ沖縄戦の細かい順序というもののはっきり理解することが出来ませんでした。けれどもガマでの生活は、一生忘れることのできない気持ちになりました。アブチラガマ、チビチリガマでのお話を聞いていると、涙をおさえることができませんでした。ピンポン玉ほどのおにぎりを一個だけで、1日中休む間もなく働いた私たちと同じくらいの年の少女たち。私ならばどうしていただろうか。目を開けれ

ばそこは血だらけで手足を引き裂かれたケガ人たちばかり。見るだけで貧血になり、失神しそうなその場所で、ウジをとってあげなければならない。私はこんな話を私なりに一生懸命、両親に伝えた。私はそれと一緒に沖縄戦を知らない多くの人々に、もっと戦争のおそろしさと基地との関連を伝えていきたいです。3日間、本当にありがとうございました。」（北岡恵理子）

・「村上先生へのお礼の手紙 午後から豊見城高校へ行かなければならぬほど、お忙しいのにお世話をしていたときありがとうございました。韓国人慰靈塔でのお話を基に、資料館に入ってみると、その場面がよく分かり、苦しい思いでいっぱいになりました。特にあの中で自決したという人々のあの苦しみが忘れるところなく心に残りました。自分の最も愛する人を殺す、戦争を知らずに生まれてきた私には考えられないことです。ひめゆりの塔ではひめゆり学徒の方に生々しいお話を聞きましたが、時間がなく全部お聞きできなかつたことが本当に残念でなりませんでした。沖縄での4日間で一番心に焼きついたのはやはり米軍基地です。あのきれいな地に飛び狂う飛行機、さとうきび畑の向こうには鉄のかたまりばかりで忘れられません。だから二度と戦争は起こしたくありません。本当にありがとうございました。」

（今西千春）

#### 【資料4】《平和ガイドの先生方からのお返事》

——いずれも学年だより『かりゆし』第30号（12月17日）に掲載されました。——

・名古屋大学附属高等学校二学年の皆様

旅行を終えて沖縄との気候差に体調はくずしていましたか。ここ沖縄はまだ暖かい日が続いています。いつになれば冬が来るのかと思う今日このごろです。皆様からの多くの感想、励ましのことばを頂きました。ありがとうございます。私が案内した事以上のものを感じて頂き感謝しています。沖縄のことを心に深くきざみ、平和について考えていることを皆様の文章の一つ一つから読み取ることができました。

あたりまえのように享受している私達の豊かな暮らしと幸せは、過去の歴史を踏台にし、今の地球を蝕みながらのものかもしれません。このようなことがほんとの幸せなのでしょうか。日々の生活にただ流されず、自分の身の回りから見直したいものです。

一人の力、一人の智恵は小さいものです。しかしそれが沢山集まれば、大きな力、多くの智恵になります。私達の住むガラス玉のような地球はひび割れが生じてきていますが、私達一人一人がそのことを認識し努力すればやがてその傷も癒えることでしょう。健全な地球を次の世代へ残してあげたいものです。

皆様の文集楽しみにしています。

## 高2沖縄研究旅行初年度の実践について

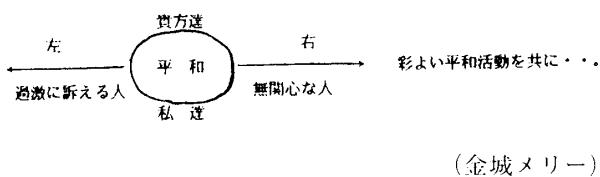
ニヘエーデービル（ありがとうございました。）  
1990.12.11 Okinawa Une（宇根 悅子）

・「お礼の手紙」本当に有難うございました。  
皆様のお手紙は、私の宝箱に収めておきます。何物にも代えがたい大切な宝物です。家族に声を出して読んで、爆笑したり、ホロッとしたので、久しぶりにリフレッシュしました。喉の故障を省みず一生懸命歌った歌が、こんなに受けるとは思ってもいませんでした。（本調子ではないのが返す返すも残念でなりません）

“さとうきび畑”の歌を、銀の穂をなびかせたさとうきび畑の中で唄えたら、きっと涙を流して喜んだでしょう。良い歌ですから、覚えて下さいね。高校卒業後何年か後のクラス会、ぜひ沖縄でやって下さい。

（今から積み立てでもしてさ……）そしたら一緒に唄えるし、又一回り大きくなった皆と同等に平和について討論出来ると思うけど。

とにかく若い貴方達が純粋に前を向いていることが分かって私の方が勇気づけられました。本当に“アリガトウ”又会える日まで……心から。



### 【資料5】《グループワークのテーマ》

#### A組

- 1班 沖縄の自然の恵みについて
- 2班 琉球王朝時代の文化
- 3班 沖縄の人々の暮らしと文化
- 4班 沖縄の食物について
- 5班 沖縄の宗教と葬儀
- 6班 THE OKINAWA ——沖縄を知る

#### B組

- 1班 沖縄の生き物を知る
- 2班 沖縄の生活文化
- 3班 沖縄の植物と果実
- 4班 沖縄のパイナップルについて
- 5班 沖縄のリゾート開発の現状と問題点
- 6班 首里について

#### C組

- 1班 沖縄の方言について
- 2班 沖縄のリゾート開発について
- 3班 壱の中の生活の現実を探る
- 4班 沖縄の実弾演習
- 5班 紅型について

## 6班 沖縄の米軍について

### 【資料6】《グループワークの一例》

#### ・C組 6班

研究テーマ：沖縄の米軍について

研究のねらい：日本における米軍の存在、米軍の軍人は軍隊や日本について、どのように感じているか。

当日の行程：かりゆし 8:30—9:15 金武町—9:40 石川球場 9:50—10:20 嘉手納基地  
11:50—12:10 昼食 12:50—13:30 沖縄タイムス社 14:30—14:50 セントラルホテル

### 《感想》

班長： 笹田千尋—こんな班長だったにもかかわらずみんなが一生懸命がんばってくれて最優秀賞がとれた。最高っすよ。

副班長：栗田浩和—終り良ければ全て良し。飛行機にもう一度乗りたい。Boeing 767 Dash 300

研究係：犬飼あゆみ—目的地を決めるのが遅かったのでどうなるか心配だったけど、とても良かったと思いました。

：杉本理恵—壕に入ったり、基地の前でアンケートしたり、思っていたよりもずっと勉強になったし、楽しい想い出になりました。

生活係：岡本英揮—おもしろかった。

保健係：山田幸恵—アンケートの時、思っていたより米兵さん達が気さくだったのには、驚きました。本当に、良い思い出になりました。

レク係：小野省悟—英語がしゃべれないのでとてもわかった。レク係なのに沖縄タイムス社では一人でしゃべっていたような気がする。でも、無事に終ったからいいや。

## アンケート結果

私達は、米軍人が戦争や、平和についてどう感じているか、沖縄住民や日本という国をどのように思っているのかを知りたいと思い、アンケートをとってみました。

場所：嘉手納基地の、あるゲート周辺

対象：米軍人、その家族

アンケート総数：19人

費やした時間：約1時間半

### アンケートの内容

Q1 基地の反対運動を知っていますか？

Yes 13人 No 4人 無回答 2人

Yesのみ質問

Q あなたは、反対運動をどう思いますか？

- ・軍隊は、ただ平和を守るために援助しているだけだ。我々は、どの国に対しても援助をさしのべるつもりで、もし日本人が我々に出て行けと言うのなら、喜んで日本を去るつもりである。
- ・日本を守ってやっているのに、反対運動をするのは、おかしい。
- ・どんな運動にも目的がある。
- ・住民がアメリカ人の存在を好ましく思っていないのは、知っている。どうしてだかわからなない。

Q 2 沖縄の基地は必要だと思いますか？

Yes 7人 No 11人 無回答 1人

Yesのみ質問

Q どうして必要だと思うのですか？

- ・政府のおえらいさんが決めたことだからじゃない。
- ・極東を守るため。
- ・平和のため。
- ・俺達は、崇高な支配者だ。

Q 3 よく街へ遊びに行きますか？

(買い物)

Yes 14人 No 3人 無回答 2人

Yesのみ質問

Q どこへ行きますか？

- ・ほとんど行かない。物が高すぎるよ。日本人はすごいね。
- ・ディスコ、商店街、レストラン
- ・ちょっと、今から店に行くよ。

本当は、Q 3 の次に Q 4 として“日本人と街でトラブルを、おこしたことは、ありますか？あるのなら何回くらいありますか？”という質問を用意してあったのですが、当然、怖くなりアンケートを行う直前に、取りやめることに、なりました。

【資料 7】《一口感想から見た、案内をしてくれたタクシーの運転手について》研究旅行のまとめとして『研究集録』を91年1月に発行した。各班のレポートや巻末に全員が一言ずつ書いた感想で、タクシーの運転手への感謝の言葉を書いている者も多い。

- ・「運転手さんが親切で助かり良かったです。」（田中秀歩）
- ・「タクシーの運転手さんの話が、とても印象に残りました」（遠藤公世）
- ・「タクシーの運転手さんがとてもよくしてくれました。私の班の研究の半分は運転手さんから聞いたことだと思います。3泊4日たくさんの人たちに支えられて沖縄研究旅行に行くことができました。いい旅行に

なって良かったです。」（鬼頭美穂）

・「僕たちの班は下調べがあまり充分でなかったので行程表とは全く違った行動になってしましましたが、タクシーの運転手の人や役場の人たちは、大変親切にしてくれました。特にタクシーの運転手の人はいろいろな所へ連れて行ってくれたので大変楽しかったです。」（奥村算浩）※この班は、「沖縄の実弾演習」という研究テーマであったが、沖縄に入ってから平和ガイドの先生の助言で、金武町役場を訪れ詳細な説明を受けることができた。

## VIII あとがきにかえて

「沖縄に日本の矛盾が集中しているなんて言う考え方方が気にくわん」という反対論があった。研究旅行の長崎から沖縄への変更をめぐる論議の中での発言であった。矛盾はいたるところに遍在している。当然のことである。何も沖縄に行かなくとも長崎でも広島でもそして名古屋でさえ日本の矛盾は見つけることが出来る。しかし沖縄には沖縄にしかない日本の矛盾があるはずだ。名古屋には名古屋にしかない日本の矛盾があるように。「沖縄に対する差別だ」、ノドから出かかった。

あの消耗な論議から2年が経とうとしている。「決して失敗に終わらせる訳には行かない」と覺悟させられたスタートラインだっただけに、無事に全員が名古屋に戻ったときには疲れがどっと出た。いまこうして沖縄研究旅行のための1年間の取り組み、そしてその後のまとめを振り返ってみると、生徒たちにとって、そして教師たちにとって、沖縄はどのようなものとして受け取られて行ったのか、いささか不安になる。

荒井剛という生徒は、沖縄へ行く前、過去の沖縄戦にこだわるよりも、今の安保体制下の沖縄の実態を学ぶ方が大切ではないか、と正論を述べていた。彼の政治的感覚は正しいと思う。しかし、沖縄戦のもとでの沖縄民衆の体験、そしてそれに踏まえた現在の沖縄県民の安保体制、日本本土への思いを一度くぐり抜けないと、彼の政治的感覚は政治主義にとどまってしまうと危惧していた。

彼の研究旅行後の感想文がVで引用されている。彼は「ぼくは、戦争を経験していないからこそ、そして100%戦争を理解することは不可能だからこそ、あらゆる角度から戦争について吸収する必要性を感じました」と沖縄戦の衝撃を語っている。

彼のような劇的な変化はないが、沖縄戦の体験者の方々の話や、沖縄戦で無念の死を遂げさせられた人々の意志を語り継ごうとしている人々の言葉が、重く石のように、心の奥深くに宿ってしまった生徒は多い。平和を希求する気持ちが一時の線香花火のように燃え

尽きるのではなく、いつまでも灯々と燃え続けていて欲しいと思う。

最後にあとがきにかえて、学年だより『かりゆし』に書いた旅行後の文章を載せて筆を置きたい。

### “かりゆし”とは……沖縄見聞録（1）

沖縄研究旅行第1年度を無事に終了できホッとしています。全員無事に帰ってきたことが先ず第一、“研究”の中身もまあまあ満足の行くものではないかということが第二、沖縄の過去と現在をある程度は理解できる姿勢が出来たのではないかということが第三。この三つの意味でホッとしています。何はともあれ、やるべき時には人並以上にやれる生徒たちの自覚があったからだと思います。先生たちの信頼にきっちと答えてくれたと思います。

かりゆしビーチ・リゾート、どうでした？高校生が泊まるにはもったいないようなホテルでしたが、ああいう施設の整ったホテルで一夜を過ごすのも良い思い出となりますね。行程を考えて、来年はかりゆしに二泊、那覇一泊が良いかも知れませんね。後輩は那覇三泊でよい！？

ところで“かりゆし”的ことです。井倉君でしたか、タクシーの運転手から「どういう意味か知ってる？」と聞かれて、「幸福という意味でしょ」と答えたら、「そういう意味もあるけど、“めでたい”という意味もある」と教えられたとのこと。

この学年だよりの名前に“かりゆし”を頂戴したのは、「研究旅行が“幸福”に終わり、“かりゆし”につながることは新担任団の願い」（第1号）からでした。この願いの前半分は実現した訳ですが、かりゆしビーチ・リゾートに泊まったことの“痛み”も、もう分かるようになって帰って来たと思います。かりゆしまで同行して下さった平和ガイドの村上先生・大野先生・金城先生のいずれもが、リゾートのビーチに入る時は初めてだとおっしゃっていました。リゾート開発の様々な問題点を調べたグループが2つありました。3日目の夜の研究発表会で、荒井君が「リゾートはその土地の文化や歴史と親しむことであって、どこの浜辺でもできるマリン・スポーツをやるだけがリゾートではない」とまとめた言葉がみんなも印象に残ったことでしょう。

かりゆしのビーチは、誰でも自由に入れる構造にはなっていませんでした。もともと誰でも自由に利用できた浜辺を、金で買い占めてしまったリゾート・ホテルが、沖縄のこどもたち・人々から浜辺での遊びを奪い取っているのです。このことに気が付かなければ、“かりゆし”はただの“おめでたい”になってしまいます。

※『かりゆし』第27号（11月26日）

### “かりゆし”で……沖縄見聞録（2）

全員無事に帰ってきてホッとした理由を、もう2つ付け加えなければなりません。一つは沖縄の暴力団抗争が“知らぬが仮”に近かったこと。たしかに国際通り散策の時は組事務所の前を通らないような指導をしましたが、ホテル内の自販機のジュースが150円で50円高いという生徒達は、ホテル前の自販機に群がっていました。ジュースを買い込むために、6時の集合時間に遅れてきた生徒もいました。そんな生徒達に、運が悪ければ、流れ玉が当たらないという保障のない組事務所との距離ではあったのです。“50円”的違いが不運につながらなくて本当に良かったというところです。那覇の高校生が撃たれて亡くなったのは我々が名古屋に戻った夜のことでしたが、沖縄最後の夜のホテルでの研究発表会の最中、組事務所の所で発砲事件があり、救急車が駆けつけるという事件が既にあったのだそうです。ゾッとさせられます。

もう一つは2日目のかりゆしビーチのことです。2時半にビーチ到着は、クラスによって多少のずれがありましたが一応無事。その後はグラスボートに分乗して、沖縄の海の中の魚たちやサンゴの観察。コバルトブルーのコバルト・スズメ（？）には亜熱帯の海であることを実感させられました。歓声が沸き起こりました。ここまで無事で予定通り。先にグラスボートから下りた生徒達の中に、男子の数人はズボンのままで海に飛び込んだり、女子も膝くらいまでは波とたわむれる生徒がいる。これも予想通りで許容範囲。問題はホテルに入ってからでした。4時過ぎから自由時間になりましたが、もう一度海に行った生徒達が20名あまりいたのです。

ビーチでの水泳については担任団の中も賛否両論でした。私は折角ビーチに泊まるのだから、泳ぎたい生徒にはその機会を作りたいという意見でした。12月に出かけた東邦、1月の名古屋学院も水泳を認めていると聞いていました。そこで10月半ばの教官会議にもかけ全教官の意向を聞きました。結果は慎重論が多く、担任団では、ビーチでは上記の程度にとどめるという確認をしました。出発前々日の事前指導でも「水泳はしない」と注意しているし、旅行委員会では教官会議にいたる経過も詳しく伝え、11月5日の保護者会でも同様のご連絡をしました。

それら一連の“注意”を無視した生徒達の行動は厳罰ものなのかも知れません。20名あまり一応全員無事に帰ってきたから良かったものの、担任団の全く掌握していないかった行動でした。クラゲ（？）に刺された生徒がひとり出た程度でしたが何かあった場合、引率者の責任問題に発展したことでしょう。過日その20名あまりを集めて厳罰注意（？）とともに、経過を聞きました。ホテルのマイクロバスで送ってもらった生徒

までいるということですから、ホテル側の対応にも問題がありそうです。ナマコやウニ、サンゴの死骸・かけらが多いということから浅瀬で遊ぶならビーチサンダルをはいた方がよい、というのが“罪人”たちの体験談でした。グラスボートでみた沖合いの深みまで行ってみたかったと動機を述べる生徒もいて、これも“知らぬが仮”、後から聞くとゾッとさせられる話です。

※『かりゆし』第28号（12月3日）

### チビチリガマで……沖縄見聞録（3）

2日目は嘉数高地の見学に予定以上の時間がかかり、バスがチビチリガマのそばに着いたのは10時10分頃。ここで説明を聞く知花さんとの約束にもう30分も遅刻している。途中の「安保の見える丘」を後回しにして駆けつけてもこんな具合いだったのですから、行程にもちょっと無理があったようです。

ところが知花さんの姿がどこにも見あたりません。我々の到着が余りにも遅いのでもう怒って帰られてしまったのかと思いました。スーパーの経営者であり村の商工会議所の副会長もされている、とにかくお忙しい人です。この日の約束を取り付ける時にも、自宅やらスーパーやら10回近くお電話して、夜に偶然（？）つかまつたきさつがありました。それを忘れていたわけではなかったのですが、この日の朝、6時過ぎに最終確認で自宅にお電話を入れたところ、もう仕入れに出かけられたとのこと。やはり昨夜お電話をしておくべきだったと反省しきり。

そばに電話があるような場所ではないので、平和ガイドの大野さんにお話を始めさせていただくことにしました。この日は実によい天気で、日差しは名古屋の真夏のものでした。座ってお話を聞いていただけで汗がタラタラ。5、6分もたった頃、階段の上の道に小型トラックが現れ、知花さんが駆けつけてくれました。知花さんはスーパーの方で待っていたということで、やはり最終確認が必要だったようでした。

3年ほど前、私がこの同じ場所で知花さんのお話を聞いたとき、「世代を結ぶ平和の像」は作られたばかりで健在でした。いまは心棒の金具や木材がむき出しなになり、無残に破壊されています。80数名のレリーフや彫刻の、当時の姿をとどめている一部の人間の顔が、本当に泣いているように見えました。「平和の像」建立の中心となって活動された知花さんは、海邦国体ソフトボール会場で「日の丸」を引きずり下ろしました。彼のこの一見過激な行動の周囲には、読谷村の、そして沖縄の平和を求める人々の声が渦巻いているよう

した。その行動への右翼からの報復措置が、彼のスーパーへの放火であり、この「平和の像」の破壊でした。

夏のような日差しの中で、ランニング姿の知花さんの顔からも汗がタラタラ流れていきました。たまたま来た野外学習の小学生たちにも、彼は嫌な顔一つせずに説明を引き受けっていました。実に誠実で、チビチリガマで無残な死をとげた人たち（身内を含む）への思いが彼の行動を支えていると実感させられるお話でした。

※『かりゆし』第29号（12月10日）

### 沖縄の暴力団……沖縄見聞録（4）

先週金曜日の夜、NHK・TVが沖縄の暴力団の抗争を特別番組で取り上げていました。ご覧になった方も多いでしょう。セントラル・ホテルの周辺も映っていました。酒呑さんの「商店もあがったりだ」という言葉が印象的でした。

本土復帰とともに山口組が沖縄進出をたくらみ、それを阻止すべく、それまでいくつか存在した沖縄の暴力団が大同団結したところに抗争の原因があるのだそうです。現在のリゾート開発・ホテルブームなどによる土地転がし、「南への道」を悪用した拳銃密輸などの利権がからんでいるようです。

暴力団入数の県民に占める割合は、沖縄が全国一なのだと思います。そんな物騒な場所で研究旅行を実施するのは問題だ、という声ちらほら聞こえるようになりました。沖縄各地で暴力団追放の集会が開かれているというニュースもありました。本土からの高校生たちが、安心して平和学習に取り組むことが出来るよう、頑張って欲しいものです。

しかしながら、なぜ沖縄にそんなに暴力団が多いのかも考えてみましょう。

「沖縄の心」は、死者や弱者や差別され続けてきた人たちへの共感だと思います。沖縄で出会った人たちの多くから受け取った印象の、ねっこのところに差別され続けてきた人たちの痛み、やさしさがあると思いました。『太陽の子』のふうちゃんの人を見る目の鋭さもこの“まなざし”から来ています。それなのになぜそんなに暴力団が多いのでしょうか。

それは『昭和史の中の沖縄』そのものだと思います。沖縄から徹底的に奪いし、戦後の日本の矛盾を一方的に押し付け、沖縄の民衆を貧困であり続けさせたからだと思います。公式に過ぎる考えかも知れませんが、沖縄の暴力団の問題は本土が作ったのだ、と思います。

※『かりゆし』第30号（12月17日）【田中】